

詩篇の黙想

主は我が牧者

松下昌義

みちしるべ文庫(二)

「主は我が牧者」

一九九九年六月二十日 第三刷発行

著者 松下昌義

発行所 京都市左京区下鴨南茶の木町二九

電話(075)78119640

みちしるべやすらぎ

目次

- 一、 まえがき
- 一、 さいわいなるかな
- 一、 天に座するもの笑いたまわん
- 一、 神を呼ぼう
- 一、 神を避けどころとする者は
- 一、 神はわが悲しみを聞きたまえり
- 一、 人間の尊厳と責任
- 一、 神をよるこぼん
- 一、 神は知りたもう
- 一、 たとえ死の谷を歩むとも
- 一、 犯す過ちから我をきよめたまえ
- 一、 神の前にわが罪をあらわし
- 一、 神は願うとき行動し
- 一、 わが神よ わが主よ
- 一、 希望は力となる
- 一、 神はわれらの避けどころ
- 一、 神の書に記されている
- 一、 神の恵みは命にまさる
- 一、 われは悩みに満ち
- 一、 神に願われている
- 一、 われらは神のもの
- 一、 神よ、われらにではなく
- 一、 神が家を建て給わなければ
- 一、 御手をわが上におきたもう
- 一、 神をほめたたえよ
- 一、 信仰の人

これはご覧のとおり「みちしるべやすらぎ」を縮小して一冊に纏めたものです。

毎月「みちしるべ」シリーズの一つとして、旧約聖書の詩篇を黙想させていただいたものを、共に分かち合うことを願って「みちしるべやすらぎ」を出しました。したがってこれは「詩篇」を注解したり講解したものではありません。注解や講解をするには、それなりの専門的な知識が必要であって、関心のある方は専門書をお読みください。

わたしは、詩篇を、「賛美」と「祈り」の詩として自分に頂いています。理屈の通りに事が進まないのが人生であり、不思議が満ちているのが人生であります。人は誰も自分の能力だけでこの人生を歩むことはできません。目に見えない神に祈りを持たずしてどうして進み行けましょう。目に見えない神に感謝と喜びを見出さずして、人生のどこで、本当の感謝と喜びと希望とを知ることができましようか。

詩篇の人は、「主（神）は我が牧者」として神を仰ぐことにより、人生の矛盾と不条理とを乗り越え、悲しみと怒りと絶望とをくぐり抜け、自らを傲慢にせず、神を賛美し、祈ることによってこの世を生き、神のもとに召されていきました。そして、今も、神のもとで、賛美と祈りの詩を捧げつづけています。その響きは、実に二千五百年余の歳月を経てもなお、私達の魂に届き、共感を覚えさせ、生きる力と慰めと希望とを与え続けていることを知る時、人生に於ける最も大切なものが何であるかを、深く知らされます。

この小冊子をとおして、その大切な智慧をみなさまと共にいささかでも、分かち合うことが来ればと願っています。

尚、この冊子の製作に労をとって下さいました、教友の林道子氏と山本哲也氏とに深く感謝いたします。

みちしるべやすらぎ

こころの清い人は幸いである — 聖書 —

さいわいなるかな

松下昌義

さいわいなるかな、
悪しき者の計略に歩まず、罪人の道に立たず
あざける者の座にすわらぬ者。

かかる人は神の法を喜びて、昼も夜もこれをおもう。かかる人は流れの辺に植えし木の期にいたりて実をむすび、葉もまたしぼまざるごとく、そのなすところみな栄えん。
悪しき人はしからず。

風の吹き去るもみがらのごとし。
されば、悪しき者は審きにたえず、
罪人は義しき者の集いに、立つことを得ざるなり。

神は義しき者の道を見守られる。
しかし、悪しき者の道は滅びん。

— 旧約聖書 詩篇一篇

この詩篇の作者は、真実の方である神を知っています。ですから、初めに「さいわいなるかな」と喜び

の声をあげるのです。

彼は、何かを願ひ、求める前に先ず、神に生かされていることを感謝します。また、生かして下さる神を讚美します。その歡喜の聲は、宇宙の隅々まで響き渡り、三千年の時間を越えて、私達のもとに響いてまいります。

すべての思いに先立って、「さいわいなるかな」と、神に感謝し、その恵みを讚美する者は、まことに幸いであります。

X

X

彼は、昼も夜も神に感謝し讚美します。

さまざまな人生の出来事のなかに在りながら、愛と力と命に生かされている信仰者の幸いを、水辺で生き生きと茂る樹々の様子に例えています。

流れの辺に植えし木の、期にいたりて実をむすび、葉もまたしぼまざるごとく、そのなすところみな栄えん。

彼は神に対して確信しています。どのようなことが生活のなかで生じて、恵みと愛と力とに富み給う神は、必ず支え、助け導かれると信じています。それゆえに、神を讚え、感謝し「さいわいなるかな」と歡喜し、こころに平安を得るのであります。

神を仰いで生きる者は、その真実の鋭いまなざしをも知っています。彼も、すべての善悪を見通される神を畏敬の念で仰ぎます。

神は義しき者の道を見守られる。
しかし、悪しき者の道は滅びん。

悪しき者の計略から己が身を避け、己が魂を汚す愚かな道に進まず、神をあざける者たちとの言動を共にすることはありませぬ。

神を仰いで生きる者は、将来に悔やむことになるようなことを、智慧深く見分け、決して感覚の欲に振り回されないように祈ります。

神を仰いで生きる者は、自分の人生の日々に起る、どのような小さな事柄についても、その導きと助けとを神に祈ります。彼は神に尋ね、謝り、神に頼って泣き、怒り、愛し、赦し、決断し、神と共に立ち上がります。そしてすべてに感謝するのです。そうすることによって、平安を得るのです。

神を畏れ、愛する者だけが、自分自身を大切にします。身体も知能も、心も思いも靈魂も神から授かったものであることを知っています。それゆえに、身体を損なわず、思いを間違わず、魂を汚すことのなきように保つことを願い、大切に

行使するのです。彼は、いつも思いを神に向けつつ、自分の両足はしっかり大地をふみしめて歩くのです。
このようにして信仰に生きる者は、確実に神の栄光の世界に自分自身を運んで行くのです。

悪しき人はしからず。風の吹き去るもみがらのごとし。

されば、悪しき者は審きにたえず、

罪人は義しき者の集いに、立つことを得ざるなり。

人は初めから悪しき者ではありません。善と悪との別れ道の前に立って、無分別に進みつづけるとき、とりかえしのつかない処に、自分自身を置くことになるのです。目に見えない悪い誘惑者は、いつも「これは、たいしたことではない」という囁きで、人を不幸に導きます。

悪しき者は、互いに集まり、ますます悪しきことの深みに落ちて行き、いよいよ救いようのない者と化してしまふのです。しかし、神の愛は、神を呼び求める者に向けられます。

愛する友よ。そのまま神を仰ぎ見よう。私たちの日々を見守られる愛と恵みに富みたまう神を、この詩篇の記者と共に仰ぎ見よう。神は必ず応え給うでしょう。



みろしるべやすらぎ

神、彼らをあざけり給うべし

— 聖書 —

天に座するもの笑いたまわん

松 下 昌 義

なにゆえに、もろもろの國人はさわぎ立ち
民らはむなしきことを謀るや。

地のもろもろの王はたちかまえ、長らは共
にはかり、神とその油注がれた王に逆らい
て叫ぶ、

「我らその枷を壊し、そのきずなを投げ捨
てよう」と。

天に座するもの笑いたまわん。

神 彼らをあざけりたまわん。

そして、神は憤りをもって彼らを責め

激しい怒りをもって、彼らを怖じ感わしめ
たまわん。

— 旧約聖書 詩篇二 —

天に神いまし、地には人がいる。この構図は非科
学的でしょうか。決してそうではありません。

天に神いまし、地には人がいるとは、人は神に非
ず、神こそ究極の支配者でありますという世界につ

いて、己が人生についての信仰による告白でありま
す。

このように世界について、自分の人生について告
白できる者は幸いであります。

人はあくせく暮らし、遂に虚しく死ぬ。これが人
生の現実であります。人生を悲観的に考えるとか衆
観的に考えるとか言うこと以前に、遂に人は虚しく
死ぬ、ということはまぎれもない事実なのでありま
す。

神なき者にとって、自分の誕生は偶然であり、自
分の人生は自分で計らい運ぶものであり、さらに神
なき者の死は虚無への旅立ちです。

神なき者にとっては、この世だけが確かな自分の
場なのであります。

それゆえに、この世で策をつくし、富を得て楽
しみ、権力を手におさめて悦に入り、名誉を身につ
けて他人をさげすみ、自分を誇ろうとするのです。
神なき者には感謝なく、折りなく、畏れなく、ただ
自分の智恵と策のみがあるだけです。

しかし、それらの一切は虚しく消え去る。なにこ
とも無かったように、すぐに消え去ります。

私の人生は、わたしのものであって、その実、わ

たしものではありません。

わたしの人生は、神のものです。なぜならば、神がわたしの人生を、根本のところまで支えたもうからです。わたしが生まれ、わたしが生き、わたしが死ぬ。これらのどれひとつにおいても、わたしの配慮はなく、ただ天の配慮、神の御意志によるものです。

にもかかわらず、なぜ、自分の主人が自分であり、自分のすべてが自分の配慮に依つてのみ立つかのように騒ぎ立てるのかと、この詩篇の人は、多くの民を見、また国家的な規模において、疑問をもつ。

なにゆえに、もろもろの国人はさわぎ立ち

民らはむなししいことをはかるのか。

なにゆえに、どうしてこのような感あはれかなことになるのだ、と彼は悲しむ。個人において、社会的規模において、国家的なレベルにおいて人はさまざま不安を持つ、良くあれと智恵を働かします。しかし、それらのすべての底てに、神の支配と力と配慮とを、彼は知っている。それゆえに騒さわぎ立てても騒さわがない。感あはれつても感あはれわない。不安をもつても不安でない。

人にはさまざまな計画があります。しかし、神がゆるされる分のみ成るのです。神の許しがなければ、人の努力も智恵による策も計画もむなく消えます。たとえ成つても決して完成することはありません。

この詩篇の信仰の人はそれを知っています。おそらく、さまざま自分の体験から、信仰による目と手と智恵とによって經驗的に彼は知っているのです。

しかし、神なき人には分からない。彼には畏れがない。自分が何者であるかが充分に分かつていないのです。

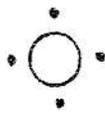
それゆえに、そのような者は愚かにも神に向かつて大言壮語するのです。

我ら、その枷をこわし、そのきずなを投げ捨てよう。

しかし、それを聞いて、天に座する神はわらいたまい、彼らを、あざけりたもうべし、と詩篇の人は言います。それだけではなく、その傲慢ごうまんと不遜ぶそんの愚かに対して、神は憤りをもって責め、激しい怒りをもって、怖おそじ感あはれわしめられる、と言います。

×
神なき人生は虚無で終わります。神なき家庭はその中心をなくします。神なき社会は節操を失います。神なき国家は墮落します。神なき世界は平和を失い、自らの手で破滅を招くでしょう。

友よ、われらは神に創られし者、神に保たれ生かされている者、そして、われらは神に完成される者であることを知ろう。そのとき、われらの人生は神と共に栄光への道をあゆみ出すことになるでしょう。



みちしるべやすらぎ

われ神を呼ぶとき 神は、その聖なる山より答えられる

— 聖書 —

神を呼ぼう

松下昌義

神よ、われに仇する者のいかに多きことか。
われに逆らいて立つ者多く、
彼に神の助けなしとわれに言う者多し。
されど、神はわれを覆う盾 わが栄えわが頭
をもたげ給うものなり。
われ声をあげて神に呼ばわれば 神はその聖
なる山より答えられる。
われは伏して眠り、また目を覚ます。神は我
をささえ給えり。
われを囲みて立ち構える千萬の者をもわれは
恐れじ。
神よ、立ちたまえ。我を救いたまえ。
神は義しき者の道を見守られる。
神は、わがすべての敵のほおを打ち、悪しき
者の齒を折られる。
救いは神にあり。神の祝福が汝の民の上にあ
らんことを。

— 旧約聖書 詩篇三篇 —

自分の愚かによって自分が受ける苦しみは、当然
の苦しみであり、それは受けねばなりません。
しかし、人の欲心によって加えられる苦しみは悲
しい。

人はすべてのことに於いて、欲深き者です。その
欲深さが人を狂わせます。

この詩篇の作者は自分の王座を、こともあろうに
わが子に奪われる危機に出会い、その攻撃から逃れ
る直中にいます。

信頼する者に欺かれ、仇となることほど悲しいこ
とはありません。それが友であれば驚き悲しむ。そ
れが肉親であれば悲嘆にくれる。それが愛する我が
子であれば、悲しみを越えて一切の言葉を失ってし
まうでしょう。まことに人の心の中には、救いよう
のない残忍酷烈な鬼が住んでいます。

われに利益なしと判ると、人は我が身の保全のため
に鬼と化します。われに利益ありと判るや、人は
畜生になりさがっても欲を満たそうとします。そこ
には、もはや神も仏もありません。一切の畏敬の念
は消え失せて、ただ欲望に振り回された人間の醜悪
さと愚劣な姿が出現します。まことに、人は罪深き
者であります。

×

×

それが人であり、わが身であるならば、神の名を呼ばざるを得ません。人を救い、わが身を救うものは決して人ではなく、ただ神のみであります。神がこの身を救うてくださらなければ、この身の救いは何処にもありません。それ故に、この詩篇の人は神を呼ぶのです。

神よ、われに仇する者のいかに多きことか。

われに逆らいて立つ者おおく、

彼に神の助けなし、とわれに言うもの多し。

彼は、決して己一人を正しい者とするではありません。神のみが正しく、神のみが助け、神のみが栄光と信じている故に、神のみに自分のすべてを向け、自分のすべての力をかけて、神に訴え、神の名を呼ぶのです。

天にいます おんちちうえさまを呼びて

おんちちうえさま おんちちうえさまと 称えまつる

いずる息に呼び 入りきたる息に呼びたてまつる

われは、み名を呼ぶばかりのものにてあり。

―八木重吉―

彼は苦しみと悲しみとの極みに在っても、なお其処から立ち上がります。

自分の力で立ち上がるのではなく、どのような人に

も頼りません。ましてやこの世の富に頼みません。彼は、それらが、自分の生にとって、最後の頼みに決してならないことを、身をもって体験したのです。彼は今、神と共に立ち上がります。

されど、神はわれを覆う盾、わが栄え、わが頭をもたげ給うものなり。

われ声をあげて神に呼ばれば、神はその聖なる山より答えられる。

われは伏して眠り、また目を覚ます。神は我をささえ給えり。

われを囲みて立ち構える千萬の者もわれは恐れじ。

神よ、立ちたまえ。われを救いたまえ。神は義しき者の道を見守られる。

人はだれしも、さまざまな苦しみに出会います。苦しみに出会うのが人生であります。このような人生であるからこそ、人は神を呼ぶことが出来るのです。どうしようもない人生の悲しみを、この世の人や物との表面的な関わりで、紛らわしたり、居直ったりしていい加減にうち過ごすならば、神に出会うべき折角の人生の苦しみを、その意味を無くすることになりましょう。

悲しむ友よ、苦しむ友よ、今、生きて働き給う神に思いを向けよう。神はささえ下さるでしょう。

みちしるべ やすらぎ

神を避けどころとする者は皆喜び祝い、永遠に
悦び歌う — 聖書 —

神を避けどころとする者は

松 下 昌 義

神よ わが言葉を聞き給え

われの深くに秘めた思いに、み心をとめたま
え

わが王 わが神よ 助けを求めるわが叫びに

み心をむけたまえ

われ 神に向かつて祈る。

神よ 朝ごとにわが声を聞たまう

われ 朝ごとに神に向かつて 備えし神を待

ち望む……………

— 旧約聖書 詩篇五篇 —

この世は矛盾で満ちています。不条理なことがこ
こかしこに起こり、その災いが思わぬときに、わが
身にもおよび、苦しみ悩みます。

人は、ときとして、ものごとの表面ばかり見て、
軽薄に裁き、無責任な陰口を、あたかもすべてを知
りつくしているかの如くに言葉します。

愚かなものは直ぐに、事の真実も弁えないままに
思慮なく同調します。

いかほど語っても、耳を傾けることなく、人はた
だ、自分の思いで、また人の言葉に振り回されて事
を決めてしまいます。

この詩の人は、「罪なくして訴えられ、神の義し
い判定を祈り求めて」います。

彼の祈りは、平穩無事に祈る形どおりの祈りでは
ありません。また、頭の中のみで考え、教えられた
とおりの神を口にしていてもありません。

この詩の人は、神を信じているのではなく、神を
知っているのです。すべてを知りつくし、すべてを
見極められ、今、自分の内と外とで躍動しておられ
る義しき神を見ているのです。

彼の神への祈りは語りかけです。彼の祈りの思い
は、「聞き給え」ではなく、「聞き給う」という喜
びに押し出されて祈っているのです。ですから、冒
頭の祈りの言葉は、そのところに於いて次のとおり
になります。

神よ あなたは我が言葉を聞きたまう。

神よ あなたは、わが深くに秘めた思いに心
をとめたもう。

彼は、深い深い感謝と喜び、希望と平安とを自分
の内にはなく、神の内を持って祈っています。

X

X

私達が、自分の深くに秘めている思いは、言葉しません。それは言葉にならず、たとえ言葉しても満足出来ず、ましてや、誰にも通じないかもしれない。ひとり自分と語り、ひとり自分と思ひめぐらし、緘黙を保ちます。とりわけ、人は歳を重ねるにしたがつて緘黙になっていきます。

しかし、この詩の人は、信仰に生きる人です。彼は神に生きる人です。神と共に生きる人です。

彼は神を「わが神」とし、「わが王」として生きています。彼の緘黙は絶望のそれではなく、喜びと安心に満ちた神と共にある故の観想のそれなのです。

われ ゆたかな慈しみをいただいて、神の家に入り

聖なる宮に向かいてひれ伏し 神を畏れうやまう。

神よ、恵みの御業のうちにわれを導き

まっすぐに、神の道を歩ませたまえ。

至上者よ あなたの御名をほめうたわん (八ノ九節)

この詩の人の生きる拠り処は、「わが神」です。死んでも生きて「わが神」の内にあることを知っているのです。信仰の人には、この世の生も死も共に「わが神」の内にある神の命の出来事です。彼の関心は、恵みの御業のうちに導かれて、まっすぐに、神の道を歩ませて戴くことに、生きる意味を見るのです。

彼にとつては、永遠の命の主を仰ぎ、その命に与らせて

戴いている神こそ、まことに讚美すべき方なのです。

至上者よ、あなたの御名をほめうたわん

ああ なんと 「わが神」に生きる信仰者は有り難く、祝福された者でしょうか。

彼の朝の目覚めは神と共に成る。彼は自分の願ひではなく、神の思いが、自分の業をとおして成ることを願ひ、神と共に一日を出発します。晴れの日があり、曇りの日があり、嵐の日があります。傲慢の日があり、悲しみの日があり、絶望の日があります。しかし、「わが神」と共に出発するのです。

この詩は次の祈りで終わります。

神を避けどころとする者は皆 喜び祝ひ

永遠に悦び歌う。

神を愛する者は守られ

神によつて歎呼させられる

神よ、汝に従う人を祝福し

盾のように彼らを囲み 恵みをもって彼らに冠らせ給う。

友よ 神を仰ごう。すべての人の足下に、神の恵みは満ちています。友よ わが神を喜ぼう。

みちしるべ やすらぎ

神はわが悲しみを聞き給えり
神はわが祈りを聞き給えり

— 聖書 —

神は、

わが悲しみを聞き給えり

松 下 昌 義

神よ、なんじの怒りによって我を罰し給うなかれ。
なんじの 憤りいばなりによって我をこらしめ給うなかれ。
神よ、我をあわれみ給え われは衰えおとろはてる。
神よ、癒し給え。わが骨はおののきふるえ魂もおそれおののく 神よ いつまでなるや。
神よ 我に目を注ぎ わが魂を救い出し給え。
死の国にありてはなんじの名を唱えず。陰府みにありては誰かなんじに感謝せん。
われ嘆きのために疲れ、夜ごと涙は床に溢れ、わが眼は憂いうれによって衰え、もろもろの仇のゆえに衰えぬ。
もろもろの悪を為すものよ、われを離れ去れ。

神はわが悲しみを聞き給えり。
神はわが祈りを聞き給えり。
我がもろもろの敵は驚き、あわただしく恥じて退く。

— 旧約聖書 詩篇六一 —

人の世には苦しみと悲しみとは常のものであります。まさに、今日は他人の上、明日は我が身の上におこります。

この詩篇の人も、その苦しみ悲しみに遭遇あひましています。

他人の苦しみは、所詮しよせんは他人の苦しみです。いかほど同情しても決してわが身の苦しみとはなりません。他人の悲しみは、やはり他人の悲しみであってどれほど近づいても決して自分の悲しみにはなりません。それは、愛が不足しているからではありません。優しさやさに欠けているからではありません。そうではなくて、それがそのまま人なのであります。それがそのまま、人であることの悲しさであり、また人であることの厳きびしさなのです。

人の世におこる苦しさも悲しさも、人はそれぞれに自分にうけねばなりません。誰かに代わってもらおうとおもってはなりませんし、事実、だれも代わ

ってあげることは出来ないことです。

悲しさも、苦しさも、痛みも自分自身で受けるより他にどのような道もありません。痛みは自分の痛みであって自分以外の者の痛みではないのですから。

その意味で、人は孤独です。自分のことは自分自身にうけるしか、他にどのような術もないのです。

自分をとりまく人々に愛があってもなくても、人は孤独な存在なのです。どれほど愛していても、どれほど相手に近づいて行っても、人は決して一つになることはできません。

どれほど子を思う親であっても、決して子に代わることはできません。子とひとつになることはできません。ただ、子の周りであらうたえ、悲しみ、なげくばかりです。

どれほど愛する者が近づき一つになろうとしても、決して一つになることは出来ません。所詮は独りは独りです。人間は、孤独な存在です。生れる時も独りであったように、死ぬ時も独りなのです。

×

しかし、この詩篇の人は、独りであって、独りではありません。彼は神を仰ぐのです。自分を創造し、保ち生かし、自分を完成してくださる神を知っているのです。ですから、苦しみに於いて、悲しみに於いて、痛みに於いて、人を見ず神に目を向けるのです。

彼は人との関係で人生のもろもろのことを見ません。人との関係で見るとき必ず文句がでます。愚痴と批判とがでてき

ます。

彼は神との関係で自分に起こっていることを見るのです。彼は、神の前に困難を持って出るので、彼は、苦しみと悲しみを神のただ怒りと見るのではなく、そこで神が自分に語りかけられる愛と救いとを聞き、且つ受けとろうとします。ここに信仰の人の生き方があるのです。

×

信仰の人は、孤独のようであって決して孤独ではありません。独りではないのです。命の根源から支えて下さる全能の神を知り、信じ仰ぎ、依り頼んでいる者であります。

夜ごとに涙は床にあふれても、その目はうれいによって寝ても、嘆きのために瘦せはそるに到っても、なお神に望みを抱き、そこで休らおうとする人です。

彼は決して孤独でないことを知っています。神の目が自分にふり注がれていることを信じているのです。

彼は、その苦しみと悲しみにあって、立ち上がらされていきます。「神よ、いつまでなるか」と、子供が親によりすがり尋ねる如き苦しみをおして、彼は立ち上がらされて行くのです。確信へと導かれて行くのです。

×

人生において神を仰ぐ者のみが、自分の孤独をそのまま抱き抱えてくださる光明をみるのです。生きているのではない。生かされてゐるのだと知るので。

この詩篇の人は、遂に神を讚美し確信と感謝で終わります。

みちしるべやすらぎ

われらの神よ、なんじの御名は
地にあまねくして尊きかな

—聖書—

人間の尊厳と責任

松 下 昌 義

われらの神よ、

なんじの御名は、いかに力強く
全地に満ちていることか。

その栄光を天におきたまえり

幼子、乳飲み子の口により力の基を置き

敵に備えたもう。

これは、仇する者、敵する者を鎮めんがた

めなり。

なんじの指の業なる天を仰ぎ、

なんじの設けたまえる月と星とを見るに、

人はいかなるものなればこれを御心に留め

たもうや。

人の子はいかなるものなればこれを願ひたも

うや。

ただ、すこしく神より卑しくつくりて栄光

と尊きとを冠としていただけかせ

御手により造りしものすべて治めるべく

その足下におきたまえり。

羊も牛も、野の獣も

空の鳥、海の魚、海路を渡るものをまでし
かなせり。
われらの神よ、なんじの御名は地にあまね
くして尊きかな。

—旧約聖書 詩篇八一—

この詩を読んで、パスカルの瞑想録の言葉を思
い出しました。

「人間の偉大さは、彼が自己の悲惨さを知って
いる点において偉大である。樹は自己の悲惨さを
知らない。ゆえに、自己の悲惨さを知るのは、悲
惨なことであるが、人は悲惨であると知るのは、
偉大なことである。」(二九七)

若いとき、わたしはパスカルのこの言葉の意味
を、深く理解できませんでした。しかし、少しは
歳をとり、神さまに生かされている自分を知るに
及んで、彼の語るところが理解できるようになっ
たように思います。

この詩篇の人は、ただ自然を讚美して、神さま
の偉大さを誉め讃えているだけではありません。
天地を創造し、それを保持したもう神の力と栄
光との前に人が立つ時、人がいかに弱く果敢なき
存在であるかを知らしめられます。まさに人は

「幼子」であり「乳飲み子」のような者であると詩います。しかし愛と恵みに富みたもう神は、そのような者をも生かしていただくさと、その有り難さを神に讚美するのです。

だが、この詩篇の人の神への讚美はそれだけには留まりません。さらにもう一步踏み込んで神を誉め讃えるのです。

それは、そのような神の有り難さに気付く智慧を人に備えたもうた神の、人に対するご計画の深さに驚き、感謝し神を讚美するのです。

人が自分の果敢なさ、弱さ、罪深さなどを知る智慧を持っていることは、たしかに人間の悲惨であります。しかし、そのような人間にもかかわらず、神は生かして下さっているのだと神を喜び讚美できるところに人間の偉大さがあるのです。

このように、人間の悲惨さと偉大さとを知ることが出来る者として、人間をあらしめたもうている神を、この詩篇の人はほめ讃えるのです。

なんじの指の業なる天を仰ぎ、なんじの設けたまえる月と星とを見るに、

人はいかなるものなればこれを御ところに留めたもうや。

人の子はいかなるものなればこれを願みたもうや。

本当にそのとおりであります。これを口ずさむとき有り難さに涙があふれて参ります。このような卑しき者が神に願われていて、どうしてなのか、どうしてなのかと思えます。ただ、ありがとうございます、ありがとうございますと唱えるのみです。

神さまが人に与えたもう祝福は、それだけではありません。人を限り無く信じ愛して、「御手により造りしものすべておさめるべく、その足下におきたまえり、羊も牛も、野の獣も空の鳥、海の魚、海路を渡るものをまでしかなぜり」人に委ねたもうたのです。

ここにこそ、人間の尊厳があるのです。ここにこそ人間の責任があるのです。しかし、絶対に思い違いをしてはならないことは、その尊厳は神が人に委ねられた尊厳であって、決して人間自身の尊厳ではない。また、その責任は、神に対する責任であって、決して人が人に対する責任ではない。また、人がただ自然としての動物や物にたいする責任ではない。このことは、人がその思いの根本にしっかりとたたき込んでおくべきことであります。

このように思いめぐらしながら、今日の人の在り方、生き方の様子を眺めるとき、神の前に在る人間の偉大さを失ってしまい、人の悲惨さだけに生きる私たちのおろかなすがたに神さまおゆるし下さいと祈るのみであります。

みろしるべ やすらぎ

われ 神によりて楽しみ よろこばん

— 聖書 —

神をよるこばん

松下昌義

神よ われ心を尽くして 汝に感謝をささげ
驚くべき御業をすべて語りつたえん
われ 神によりて楽しみ、且つよろこばん
至上者よ 汝の御名をほめうたわん

— 旧約聖書 詩篇九篇 —

この世は、人の思いや努力では、どうすることも出来ないことがらで満ちています。でも、その不思議は、よくよく気をつけて見る目を持っていないと見過ごしてしまいます。

朝、太陽が東からのぼり、万物を照らします。その光りは私達ひとりひとりのもとにまで届きます。そこにはなんの分け隔てもなく、悪人にも善人にも苦しむ者にも喜ぶ者にも、怒る者にも及ぶのです。よくよく考えてみますと、これほど不思議なことはありません。しかし、私達はその出来事を、日常的な当たり前のこととして過ごし、感謝も喜びも覚えません。それどころか、それらの出来事に感謝し、喜ぶ者を異様な人と感じ、軽蔑のまなざしで見ると

とさえあります。

しかし、思いを謙虚にして、静かにものごとを見るとき、この世は不思議で満ち、その中身は感謝すべきことがらで充滿しているのです。

自分の生きていることに於いても不思議が満ちています。私達は、生きて来たこと、生きて居ること、又生きて行くことの表面で起る事柄に、いつも喜んだり悲しんだりしています。營めているかと思つと貶したり文句を言つたりします。希望に燃えているかと思つと失望し、不安におののいてしまいます。自分が生きていることの表面ばかり見ていては、

私達の感情はいつも揺れ動くだけです。それは、海の表面ばかり見ているのと同じです。表面の海が荒れ狂つていても、海の深みは何時も静かなのです。

自分の人生の深みに目を向けてみましょう。例え自分の人生の表面での出来事がどれほど不安であっても悲しみであっても、私達の人生の深みには平安があるのです。私達の人生は自分の表面の感情で決して動かされない、安心がどっかりと備えられているのです。大海が、その深みから地球上にあるすべてのものを抱き抱えているように、私達も目に見えない不思議に抱き抱えられ生かされているのです。私達の思いを超えた有り難きものこそ神さまであります。どのような人も有り難き神さまに抱き抱え

られ、有り難き者とされているのです。

この詩篇の人は、この有り難き事実を知っています。否、知っているだけでなく、自分の生活の出来事において起こっているひとつひとつにおいて、その有り難さを実際に見出し、有難さに耐え切れなくなって歓喜の声をあげるのです。それはただ讚美につきます。

神よ われ心を尽くして、汝に感謝をささげ
驚くべき御業をすべて語り伝えん

われ、神によりて楽しみ 且つよろこばん
至上者よ 汝の御名をほめうたわん

彼は、自分の表面感覚の欲望が満たされたので、神に感謝しているではありません。そのような感謝は一時です。過ぎれば感謝は忘れ去られ、もっと大きな欲望の満足を与えてくれるものに出会えば、先の感謝は色褪せて、忽ち不足と愚痴との文句に変わってしまうでしょう。

彼は、人間の弱さも傲慢さも、利己的な自分であることも悉く知っています。また、人生が願うように行かず、さまざまに苦しいことがあることも知り尽くしています。

だからこそ、彼は、それにも関わらず、人間のすべての深みで、すべてを許し、支え導いてくださる神の有り難さを

をたしかに見て、そこで安心し、それを喜びはめたたえるのです。

「われ 神によりて楽しみ、且つよろこばん」なんといい楽しみ、なんといい喜びでしょう。自分をよろこぶのではありません。人によつて喜ぶのでもありません。神を喜ぶのです。自分が神さまに抱き抱えられ生かされていることをよろこぶのではなく、そのように生かして下さる神を喜び、その神の愛を楽しむのです。

神の見えない支えがなければ、私達は一時も命していることはできません。自分の身体も、自分の知識も、自分の富も、その全ては神の手の中にあるのです。すべては与えられているものなのです。それを知らず、自分一人で立つと思つていゝる者は、自分の傲慢のゆえに、自分自身で遂に倒れることになるでしょう。詩篇の人は詩います。

神をしらぬ民は、自ら掘った穴に落ち 自ら張った網
に足をとられる。自らの手で仕掛けた罠にかかる

神は愛です。神は決して裁かれません。裁きは自らの手
自分に招くのです。

自分を生かし、万物を命させたもうている神を喜ぼう。この詩篇は次の祈りで終わっています。

神よ 願はくば神を知らない民に、彼等が人間にすぎないことを知らしめ給え。

みちしるべ やすらぎ

これは何者か。知識もないのに神の経輪を
隠そうとするとは
— 聖書 —

神は知り給う

松下昌義

ああ神よ、なぜ遠く離れて立ち、苦難のとき
に隠れ給うや。

貧しい人が神に逆らう傲慢なる者に責め立て
られ、その策略に陥ろうとしているのに。

悪しき者は自分の欲望を神に向い嘯く。貪欲
で、神をたたえながら侮る。悪しき者は高慢

で神を求めず、すべて、神を無視して企む、
神の裁きはあまりにも彼には高し。彼の道は

いかなる時にも力をもち、己に反対する者に
自分を誇示し、われは揺さぶられることなく、

災いにあうことはないと思う。その口は欺き
と暴虐に満ち、その舌の下には災いと争いと

がある。……

神よ、立ち上がり給え。御手を上げ給え。貧
しき者を忘れ給うなかれ。……

— 旧約聖書 詩篇十篇 —

これは人間の悲痛なる叫びであります。なぜ悪
人が富み栄え、善人が苦しむのか。あつてはなら

ぬことが、堂々と手を振り胸を張って大道を闊歩
している。この矛盾、この不条理が何故あるのか。
神はどうしているのだろうか。神など実はないの
ではないか、と心ある人は思い悩みます。

この世の悪の問題、苦難の問題は私達にとって永
遠の課題であります。おおくの先人がこの問題で苦
しみ悩みつつ、その真相を求めてきました。ある人
達は、誰にも頼ることなく、自らの手で正義を戦い
取り、実現すべく立ち上がり、また、奮起すべきこ
とを多くの人々に訴え迫りました。しかし、未だに
人間社会には悪人が富み栄え、善人が苦しんでいる
ことにはかわりはありません。それ故に、この詩篇
の記者の苦しみは、私達に深い共感を持って迫って
来ます。

それにしても、この詩篇の人の呻くような祈りは
決して絶望のそれではありません。それはこの詩篇
十篇の祈りを最後まで聞けばよくわかることです。
彼は、神の手の中で、現実の不条理を悩み苦しみ
そして、憤りを覚え悲しんでいるのです。彼は自分
に於いては悲しみ、絶望し、憤りを覚えているので
すが、神に在っては安心をもち、希望をもって憤り
を抜け出ているのです。ここに彼の信仰の人として

の強さがあります。

かれは最後に次のように祈ります。

神は必ずご覧になる。その残虐と恨みとを見てこれに手をくだしたまへり……………

神は世々限りなく王。……………神よ、汝は貧しき者に耳を傾け、その願いを聞き、彼等の心を確かにし、みなしごと虐げられている人のために裁きをなし給ふ。

私達には出来ることと出来ないことがあります。また、分かることと分からないことがあります。出来ないことは神のものであり、分からないことは神のものであります。例えば、明日の我が身のすべてはだれにも分かりません。分かるのは今です。ですから賢明な人は、今を智慧ぶかく生き、それを基にして明日を計らい希望として願うのです。そして、その希望としての願いが、私達を明日に向かって生かさせるのです。

希望としての明日は私達のものではありません。いうならば、それは明日のものであり、神のものなのです。私達はこの一点によくよく思いを向けねばならないのです。明日を自分の計らいですべてどうにでも出来るとおもふことは傲慢であります。ひょっとすると、明日わたしは死ぬかもしれないのです。希望として願う明日は、明日自身に委ねねばならないのです。

ですから、キリストさまは言われました。

明日のことまで思い悩むな。明日は明日自身が思い悩む。その日の苦勞は、その日だけで充分である。

明日の主人は私ではなく神であります。にもかかわらず、明日の主人が自分であり、明日を自由に自分の力で出来ると思ひ込むところから、悲しみや不安や、憤りや不信や争いが生まれて来るのです。

私達は明日に向かって最善の願いと努力とを知恵ぶかくしなくてはなりません。しかし、明日は自分のものではないのです。神のものなのです。

なにもかも知っている者のように智慧者ぶって、さまざまな人生に於ける矛盾や不合理、不条理に憤りを覚え、あげくの果ては神はどうしているのだ、神などいないと叫ぶ者は、まことに身の程しらずの傲慢者であります。

どのような事柄も、神は見ておられ、知っておられ、それに相応しく、ご自身の深い御旨で対処なされます。それを知らないのは人間だけです。ですから、何時までも人は愚かさを繰り返すのです。

この世の不条理で悩み悲しみ、考える友よ。神はすべてを知っておられる。その愛の中で、悩み、悲しみ、考え努力して安心していようではないか。

みちしるべやすらぎ

神は共におられる — 聖書 —

たとえ死の谷を歩むとも

松下昌義

主はわが牧者なり、

われ乏しきことあらじ。

主はわれをみどりの野にふさせ、

いこの汀にともなわれる。

主はわが魂を活かし、

御名にふさわしく、我を正しい道に導かれる。

たといわれ死の陰の谷の中を歩むとも、

わざわいをおそれじ。

なんじ我と共にいませばなり。

— 旧約聖書 詩篇二三 —

私たちはとても弱い者です。強そうに見えていても、とても弱い者です。

身体も健康、生活も順調に運んでいるときにはなんの不安もありません。しかし、健康を損ねたり、人間関係が旨くいかなくなったり、仕事のうえで問題がおこったり、夫婦や親子の間にさまざまな悩みがうまれたりしますと、勿ち不安が胸一杯にひろ

がって、昼も夜も悩みます。

氣力がなくなり、心が落ち着かず、明るい思いが消え重くてどす黒い想念が自分を取り囲み、表情にも行動にも和らぎがなくなり、ますます。

わたしたちはとても弱いものです。強そうに見えていても、とても弱いものです。

× ×

このようなとき、わたしたちはどのようにすればよいのでしょうか。

わたしたちはそのようなとき、自分自身にやさしく、次のように語ってあげましょう。

「なにも心配することはありません。人がこの世でさまざまな事に出会うのは普通のことです。一年に春があり夏があり秋があつて冬が来るように、人の一生にはさまざまな季節があります。一日に朝あり昼あり、そして暗い夜がある如くに、私達の一生にはいろいろな時があるのです。また、雨、雪、炎、暴風、地震、雷、さまざまな出来事が起こるように、人の一生には同じことがおこるのです。だから、今、あなたが出会っている事柄はけつして特別のことではないのです。この世のすべてのものが出会うであろう出来事に、出会っているにしか過ぎないのです。恐れることはありません。心配することはありません。あなたは、今、普通のことに出

会っているのです。」

X

さまざまな不安に出会って、もっとも恐ろしいことは、その不安に不安を抱くことです。人生に於いて当たり前の出来事に
X
出会っているのに、それを、特別な出来事のように思い込んで
しまうことは、案じるひつようのないことに恐れを抱きおの
いているようなものです。

樹木を見ましよう。彼は動くことができません。ただひと処
にじっと立って、雨を受け、風を受け、寒さに耐え、暑さに耐
え、暗い夜も、明るい日中も、そしてさまざまな外敵にも堪え
X
忍び、それらを自分の成長の糧として天に向かって成長して行
きます。

彼らも弱いものです。しかし、さまざまな環境の移り変わり
を当たり前のこととして、その弱さを嘆くことなく、そのまま
X
で生きています。

いつも順調にことが進めばよいと思います。悲しみも苦しみ
もなく、たとえ、それらに出会っても、すぐにそれらが消え去
り、楽しい事ばかりに囲まれて過ごしたいと思います。

しかし、そのような人生など何処にもありません。そのよう
な人生は異常な人生です。正常を欠いています。それは欲張り
の考えることです。そのような考えを持って生きていますと、
当然の悲しみや苦しみが自分に押し寄せてくるとき、自分が最
も不幸で哀れな者になったかのように思い込み、悲しみと不安

とで狼狽してしましましょう。

X

先の詩篇をもう一度声をだして読んでみましょう。出来れば
X
何度も声を出して読んでみましょう。そうすると、この作者も
人生の苦しみの直中に在り、不安と悲しみを背負っている方
であることが分かってきます。しかし、彼は自分の心の深いとこ
ろに、とても大きな拠り処を持っており、それゆえに不安と苦
しみの中にありながら、安心と希望とに生きていくことに気付
きます。

彼の最初の言葉はとても確信に満ちています。目には見えな
くとも、自分が愛と恵みに富みたもう神の確かな御手の中に生
かされていることを信じています。

私は子羊のように弱き者です。問題の前でただ恐れおののく
しか他ありません。しかし、か弱き子羊を愛し抱きかかえる心
やさしい羊飼のように神は私を守り助け導きたもうので安心で
X
す。と告白するのです。

さまざまな事が起こる人生に於いて、そこから逃れるのでは
なく、さまざまな問題に自分が何を拠り処として対処して行く
かに、わたしたちの思いを向けるべきであります。

先の詩篇の作者は、愛と恵みに富む神に自分のすべてを託す
ことにより、「たといわれ死の陰の谷の中を歩むとも、災いを
恐れませんが、神が共におられるからです」と大安心を告白して、
立ち上がっていきました。

みちしるべ やすらぎ

わが口の言葉が神に喜ばれ、わが心の想いが、
神の御前におかれるように — 聖書 —

犯す過ちから我をきよめ給え

松下昌義

知られずに犯す過ち 隠れたる罪から われ
を清め給え

願わくば 汝のしもべを 驕りから引き離し
支配されないようになし給え
されば われは清められる

どうか わが口の言葉が神に喜ばれ わが心
の想いが 神の御前におかれるように
ああ 神よ、わが岩 わが贖い主よ

— 旧約聖書 詩篇十九篇 —

「天は神の栄光をあらわし、大空は御手の業を
示す……」という讚美ではじまるこの詩篇十九篇
は、すでに多くの人々に親しまれています。

右に掲げました詩は、十九篇の三分分の最後の
部分の詩です。

× ×
ここには、善良に生きようとする人間の、謙虚
で誠実な祈りがあります。

知られずに犯す過ち、隠れたる罪から我を
清め給え

ねがわくば、汝のしもべを、驕りから引き
はなし、支配されないようになし給え

× × }
人はだれでも過ちを犯す者です。隠れた罪を密
かに自分の内に秘め持っている者です。これが
まぎれもない自分という者です。

でも、だからといって、その人は悪い人とはい
えません。

私は今、決して自分に居直っているのではあり
ません。私達は、つい、自分の思いに反対して過
ちを犯してしまうのです。隠れた罪を自分の内に、
哀しみとともに秘めて生きています。

その意味では、すべての人とこの詩の人とは同
じです。

しかし、この詩の人と私たちとは、大きな違
いがあります。それは、この詩の人は、自分の過
ち、自分の内に秘めている罪を、神に言いあらわ
していることです。

よい人であるというのは、あやまちを犯さない
人ではなく、あやまちをおかさないようにしようと
願う人です。

わたしたちは、過ちを悔い、自分の罪を自分の内に隠して
しまします。しかし、それは解決の道ではなく、むしろ自分
の内にもう一つの過ちを積みかさね、さらに罪を自分の内に
秘め持つことになるだけです。

自分の過ちをごまかしたり、自分の罪を他人のせいにする
ことは、自分自身に汚点をつける以上に、それは自分自身の
心に穴をあけるようなものです。それは、自分自身の内にあ
る喜びの一つが失われ、苦しみと哀しみを自分の内に増し
くわえることとなります。

この詩の人は、自分のあやまちを隠しません。自分の罪を
他人のせいにもしません。どのような弁解もしません。

彼は、すべてを神にいいあらわすのです。語り告げるので
す。そして、われを清めて下さいと祈るのです。

彼は、自分自身のことを、「汝のしもべ」と言います。彼
は自分が神に愛されている者、神に導かれていた者であるこ
とを知っているのです。だからこそ、自分のことを「汝のし
もべ」というのです。

人生とは、罪の嵐の海を行く船の姿です。さまざまな過ち
罪、驕り、敵意、時として恐ろしい殺意までが、私達の思い
を支配し、混乱の中へ引き込み、暗黒の淵へ沈めようとして
きます。このような嵐の海を、どうして自分の力だけで進むことが

できましようか。ごまかして秘め、弁解して潜り抜け、他人
のせいにして安心し、みんなも同じだということでは居直って
ようやく生きて行くしか他に、どのような道もありません。
しかし、それは、自分の心に穴をあけ、自分の魂から喜び
を一つずつ失わしめ、哀しみに罪を増し加えるばかりとな
るだけです。

この詩の人は、このような人生の恐ろしい現実をよくよく
知っています。だからこそ、彼は、神に祈るのです。なぜな
ら、人生のもうひとつの確かな現実を知っているからです。
それは、神こそ救いの岩、神こそ人を本当に生かす自分の命
そのものであるという現実です。

彼は、「ああ、神よ、わが岩 わが贖い主よ」と語りかけ
ます。岩とは確かなもの、安らぎを与えてくれるものであり、
贖い主とは、罪から救うものということで、それは命を与え
るものことであります。

かれは祈りません。その神を知って祈ります。自分の言葉と
心の想いとが、神の前に届き、喜ばれるものであるようにと
祈るのです。

愛する友よ、何も自分の内に秘めておくことはありません。
過ちを悔いてばかりの日をすごすこともありません。神の前
に、この詩の人と共に全てを語ろう、神は必ず、喜び聖めて
くださいます。

みろしるべやすらぎ

さいわいなるかな、その罪を消し去られた者

— 聖書 —

神の前に わが罪をあらわし

松 下 昌 義

さいわいなるかな その不従順がゆるされ

その罪が消し去られた者

さいわいなるかな 神に咎を数えられず そ

の心に欺きなき者は

われは黙しつづけ 終日うめきに骨まで朽ち

はてり

神の御手は昼も夜も我が上にありて重し

我が身の潤いはかわりて 夏の日照りのごと

くになれり

かくて我 神の御前にわが罪をあらわし

わが不義をおおわざりき われ言う 我が罪

を神に言いあらわさんと かかるとき 我が

罪をゆるしたまえり……

旧約聖書 詩篇三十二篇

この詩篇の作者は、大きな罪を犯し、それを自分
の内に秘め持ち、苦しんでいます。

しかし、このことは彼一人のことではありません。

私達のだれもがみんな同じような罪を、密かに自
分の中に秘めて生きています。

私達は、さまざまな状況の中で、言うてはならな
いことを口にする事によって人の心を傷つけ、為
してはならないことを行って相手を痛めつけ、自分
に悔いを残します。

「あの時は、若かったからだ」「あれは、時のほ
ずみというもので……」「悪いのは相手だ」「時代
がそういう状況をわたしに強要したのだ」などと、
自分にどれほど弁解しても、その罪は人を突き上げ
てきます。逃れても逃れても、罪は追い掛けて来る
ものです。

この詩篇の作者はその苦しみによって、己の骨ま
でも干涸らびるほどに、その心に潤いをなくし、心
身ともに打ちひしがれた状態になってしまいました。
人の目ではありません。人は欺けても、欺けない
方がおられます。自分は欺けても、欺けない方が自
分を越えて自分の内におられるのです。

一度我が身から出ていった咎は、再び自分の手に
よっては消すことは出来ません。まさに、「落花枝
に上り難く、破鏡重ねて照らさず」の例えのとおり
であります。

×

×

自分をゆるすものは自分ではありません。また、他人でもありません。否、なぜなら、人が犯す咎は自分自身との関わりの中のできごとではなく、また、自分以外の人との関わりの中のことからではないからです。人が犯す咎は、すべて神との関わりの中での出来事なのです。それは、咎だけのことではありません。私達が為すすべての業は、人の内では為されつつ、その実は、神の内、神との関わりの中で起こっていることなのです。隠れた悪も、善も、すべては明るみの中で為されるのと同じだと、イエスさまはお示しになるのです。ですから、自分で自分をゆるすことも、自分を人がゆるすことも出来ないのです。事実、それでは、自分は安心できないのです。

× ×
人を本当にゆるすことが出来るのは神のみです。神のゆるしのみが、人に、ゆるされた喜びと安心とを与えることが出来るのです。

私を創造したのは人に非ず、神です。私を今保つて生かしているのは人に非ず、神です。私を完成するのは人に非ず、神です。神こそ、我が創造者、我が保持者、我が完成者でいらっしゃるのです。その神のゆるしを得ない限り、人には本当の安心は絶対に来ることはないでしょう。

× ×
詩篇の記者は、遂に、神の前に己の罪咎のすべてを告白することによって、苦惱から救われます。人に非ず、自分に非

ず、神に対する徹底した悔い改めに於いて人はゆるされるのです。「あなたの罪はゆるされた」というイエスさまの言葉によって、どれほどの多くの人々が苦惱から救い出されたことでしょう。今も、十字架の上から、イエスさまは、罪咎を背負って悩む多くの人々に、「汝の罪ゆるされたり」と、ゆるしの福音を語りつづけています。

× ×
この詩篇は、神に対するゆるしの祈りではなく、神にゆるされた者の感謝の祈りです。そしてさらに、ゆるして下さる神を知り、仰ぎ見ることが出来る信仰にあずかっていることの喜び祈りであります。

× ×
されば、神をうやまう者は 神に遇うことが出来る
間に祈らん。大水あふれ流るるとも必ず 我が身に
およばし。

神はわが隠れ家 患難をふせぎ我を守り 救いの歌
を持って 我を囲みたまわん。

そして、彼は確かな神の声を聞きます。

× ×
我汝を教え 歩むべき道に導き わが目を汝に注ぎ
さとさん

友よ、ゆるし、導き給うお方がおられる、神を仰ごう。

みちしるべやすらぎ

— 聖書 —
神に望みをおく者こそ地を継ぐ

神は願うとき行動し

松下昌義

悪をなす者のために心をなやますことなかれ
不正を行う者の為にいらだつな

彼らは草のようにまたたく間に枯れる
青草のようにすぐにしおれる

神に信頼し善を行え

この地に留まって 真実をもって糧とせよ

神に自らをゆだねよ

神は汝の心の願いをかなえ給う

汝の道を神にゆだねよ

神は願うとき行動し

汝の正しさを光りのようにあらわし

汝の公正を真昼のように明らかにされる

神の前に黙して 神を待て

世渡りの上手な者のためにいらだつな

怒りを解き 憤りを捨てよ

心を悩ますな そは 悪に誘われることだ

悪を行う者は立ち滅ぼされ

神に望みをおく者こそ地を継ぐ

— 旧約聖書 詩篇三七篇 —

この詩は、信仰の人のさとしの言葉です。この世は、善人が認められ、正義が必ず栄えることはありません。むしろ、悪人が富み栄え、不正が勝利者のように闊歩することがあります。

このような矛盾と不条理を見て、誠実に生きる者は心を悩まし、いらだちます。

しかし、老練な信仰の人は静かにさとしします。

「悪をなす者のために心を悩ますな。不正を

行う者のためにいらだつな。」

そして、その理由を次のように言います。

「心を悩ますな、それは悪に誘われることだ。」

本心に、その通りだと思えます。悪人に憤りを

覚え、怒りに自分をみたすなら、それは、自分自身を汚すことになるのです。

自分が怒りと、憤りに満ちることによって、自分自身を悪に染めてしまっているのです。

たしかに、悪人に怒りを覚え、憤りが全身に満ちているときの自分の顔と心とは鬼になっています。

この詩の人も、いくども、このような道を通ってききました。そして、ふと、自分自身に気づいたとき、「悪に誘われている」自分自身を見出したのです。そのとき、「悪人」についてはなく、「悪」そのものの恐ろしい畏と誘いの巧妙さと、

恐ろしさに気づいたのです。

たしかに、わたしたちは、不正を弾劾し、悪人を糾明することの勢いが余って、自らが知らない間に、その不正よりもその悪人よりも、より大きい不義を働き、悪を働いてしまう人になることがあるものです。その意味で、「心を悩ますな。それは悪に誘われることだ」という さとしは、深く信仰の智慧に基づいた言葉であり、こころして自分に受けたいとおもいます。

この詩の人が、はじめから終わりまで繰り返して繰り返さずと言葉は、「神に信頼し、善を行え」ということであり、「神に自らをゆだねよ」ということです。

この言葉に、人は消極的だ、逃避的だ、敗北的だ、と笑うかも知れません。

しかし、これが信仰の人の勝利の道なのです。信仰の人はこの道しか、他にどのような道もないことを知っているのです。

信仰の人は、自分よりも神を確かなものと知っているのです。神がすべての創造者、神がすべての保持者、神がすべての完成者であることを知っているのです。

すべては神の許しと、御手の上にあることを知っているのが信仰者であります。どのような不正も、どのような悪も、神の前に草のように枯れ、青草のようにしおれることを知っているのです。

たしかに、すべては消え去って、その跡形も残すことはなかったのです。

神を信頼するということは、神において「あきらめる」とではありません。この詩の人は、神において「あきらめなさい」と言っているではありません。そうではなくて、悪人のところにあつて怒りに立つた、自分の正義にあつて憤りに立つた、神の正義の働きに立ちなさいと言うのです。このことを彼は次のように言います。

「神に自らをゆだねよ。神は汝の心の願いをかなえてくださる。汝の道を神にゆだねよ。神に頼む時神は行動し 汝の正しさを光りのようにあらわし 汝の公正を真昼のように明らかにされる。

彼は、これを理屈として語り教えているではありません。これは、彼の信仰による体験であり、信仰による確信であり、信仰によつていただく、確かな希望なのであります。

次の、さとしは、彼の信仰の人としての生き方を明確にあらわしています。

「神に信頼して善を行え。この地に留まって 眞実をもって糧とせよ」

悪と対峙し、不正から眼を離すことなく、それを見定めて神に在って毅然と立ちつづける態度こそ、本当の信仰の人であり、確実に最後の勝利者となる道なのであります。

みちしるべ やすらぎ

わが神よ、われに遠ざかることなかれ すみやかに我を助け給え

—聖書—

わが神よ、わが主よ、

松下昌義

神よ、汝の憤りをもって我をせめず

激しい怒りをもって我を懲らし給うなかれ

汝の矢がわれに突きささり

汝の手がわが上に下った

汝の怒りによって

我が肉には全きところなく

わが罪によって

わが骨に健やかなところなし

……我が愚かさによって

我が傷は悪臭を放ち 腐れただれる

われは折れかがみ いたくうなだれ

ひねもす悲しみつつ歩む

……われは衰えはて 打ちひしがれ

わが心は激しい騒ぎによって呻きさげぶ。

神よ わがすべての願いは汝に知られ

わが嘆きは 汝に隠れることなし。

わが胸は激しく打ち わが力は衰え

わが目の光りもまた われを離れ去れり

わが友、わがともがらは

わが災いのゆえに離れ去れり

わが親族もまた遠く離れて立つ

……我を損なう者は滅ぼすことを語り

ひねもす欺くことをはかる

されど我 耳ふさぎて聞かず

口閉じて答えず

されど 神よ われ汝を待ち望む

わが神 わが主よ

……わが神よ われを捨て給うことなかれ

わが神よ われに遠ざかることなかれ

すみやかに我を助け給え。

—旧約聖書 詩篇三八篇—

この詩は「個人の嘆きの歌」と言われ、詩篇のなかの「七つの悔い改めの詩」のひとつに数えられているものです。

これを詩う人は、かなりの重病にかかり、肉体的な苦痛に苦しみ耐えていることが、その詩からよくわかります。

「汝の矢がわれにつきささり」とありますが、この表現は、古代東方の、病は神の毒矢によって起きるといふ神話的な表象と関係があると言われています。

X

X

それにしても、さまざまある人の苦しみのうちで、どうしても逃れられないのが病による苦しみであります。どのような病も、その病を自分に背負わなければ、その苦しみは本当にわかりません。

なぜ、わたしが病まなければならぬのか、という問いは私達にとって永遠の問いであります。

この詩の人は、「病」を今、自分の病として病み、病の凄まじさのなかで、まったく打ちひしがれています。

病がどれほど、その人にとって過酷な出来事であるかということとは、言葉出来ない事実であります。いうならば、病にかかる以前に、どれほど病に対して備えていても、一旦病みその苦しみと対峙しなくてはならなくなるなら、いかなる備えも、すべて言葉の世界のことであつたことに気づくのです。

この詩の人は、まことに激烈な苦しみのなかにあつてただ呻くのみです。

わが傷は悪臭を放ち、腐れただれる。われは折れかかみ、いたくうなだれ、ひねもす悲しみ歩む。

われは衰えはて、打ちひしがれ、わが心は激しい騒ぎによって呻き叫ぶ。

彼は、ただ自分に耐えつつ、神の前で己の病を引き受けよ

うとしています。彼は、自分が病むことに、苦しむことに、そして、呻きつつも、決して神に齒向かおうとはいたしませんでした。むしろ、彼は苦しめば苦しむ程に、神に対して敬しをこらうのです。

神よ、なんじの憤りをもって我をせめず、激しい怒りをもってわれを懲らしめ給うなかれ。

わが罪によって、わが骨に健やかなところなし。わが愚かさによって、わが骨は悪臭を放ち、くされただれる。

病むことを、神の怒りと受け取ることは、深い深い人間の罪の意識から生じる。病むことが神からの罰としてでなく、己の不完全さのそれとして、人間存在の最も深いところで神の怒りを引き受けようとする徹底した謙虚さが、彼にあり、それだからこそ、「われ汝をまち望む」と祈るのです。

それにしても、人は病む者に対して、さまざまな言葉をかけ、態度をとる。しかし、それはどこまでいってもその者の客観的な思いに過ぎないのではないのでしょうか。痛みなく、苦しみなく、ただ語るばかりが多いのではないのでしょうか。だからこそ、何とでも言えるのです。しかし、これも又、人の限界のなせることであるとも言えます。

病む者に対して、謙虚でありたいと思います。軽々に理解したように語ってはならないと思います。

病む者と共に、わが神よ、わが主よ、と祈るのみです。

みちしるべやすらぎ

神は、わが叫びを聞き給えり

— 聖書 —

希望は力となる

松下昌義

われ主なる神を待ちのぞめり、待ち望めり、
主なる神は耳を傾け、わが叫びを聞き給えり
また、我を滅びの穴より、泥の中より取り出し、
わが足を岩のうえに置き我が歩みを固く
したまえり。

主なる神は新しき歌をわが口に与え、讚美の
歌をわが口に授けたまえり。

—旧約聖書 詩篇四十一—

この詩篇の作者は、自分の人生に希望を持ち、期待に満たされています。

彼は決して若くはなく、むしろ歳を老いている者であり、しかも、そうとうの人生の苦勞を自分の背に負っているようです。にもかかわらず、彼は若者のように自分の人生の将来に期待し、希望と確信とで胸を膨らませて生きる喜びに満たされています。いったい何が歳老いたこの作者をそのようにしているのでしょうか。

その秘密は人生に於ける希望ということにあります。希望とはどういうことなのでしょう。それは自分の人生の歩みに見通しがつくということであり、未だ自分の手元には来ていない自分の将来がハッキリし、それについての見通しに確信をもつことが出来ることでもあります。

それにひきかえ人生の不安とは、自分の将来の歩みに見通しが立たないということでしょう。言うならば、出口を見つけないまままで暗闇のトンネルを歩んでいる者のようです。

今がどれほどに暗く不安な状況に在っても、行く手に出口の明かりを見出しているならば、どのような恐れも不安も乗り越えて進むことが出来ます。

希望を持たぬ者はかがんで歩きます。しかし、希望をもっている人は苦しみの中にいても、胸をはり一筋の道を歩きます。

八木重吉も詩っています。

尊いもの

それは真直ぐにみつめた姿だ

彼は不安や苦しみ、悲しみや恐れの中にありなが

ら真まつ直すぐに天を仰ぎ神を仰いで生きました。それだからこそ、同時代に彼よりも長く生きた人の誰よりも、後の世の多くのの人々に希望と安らぎとを与える者となったのです。

本当に尊いことは、この世を越えて神に通じる道を、真まつ直すぐに見つめて歩く姿であります。

人が信仰を持って生きるといふことは、この世の滅くび逝ゆく富とを得、権力や名誉を得る道ではありません。また、この世に少しでも長く生きるためでもありません。そうではなく天に通じ、神の栄光の懐こころに到る道を確認し、それを真まつ直すぐに見つめて生きることあります。

ですから、新約聖書へブル書は次のように私達に語っています。

信仰とは、望んで居る事柄を確信し、まだ見て

いない事実を確認することである。

—へブル人への手紙十一章一節—

見えるものは希望ではありません。それはやがて消えてなくなりません。富も権力も名誉もすべてはやがて消えてなくなりません。私達を本当に生かす希望とはなりません。それらは事実ではなく虚構うそなのです。すべてはこの世の一時の依り頼たのむべきものにしかすぎません。本当に依り頼たのむべき事実は神にあるのです。人を越え、この世を越えた神の誠まことにあるのです。信仰とはこの事実じじつに覚さめ、開ひらくすることあります。

全またき信頼は確実な希望となるのです。不信の中からはどのような希望も生まれては来ません。先の詩うたをもう一度声を出して言葉してみましよう。

彼は、全またき神への信頼が確実な希望となり、それが現実となって我が身みにあふるるばかりに及およんだ、という神の恵みの体験たいけんを持っているようです。理屈りくつではなく、事実として自分の身に、神の力と恵みとを知り覚えていきます。彼は絶対不動の神の岩の上にわが身みを置くゆえに、内からこみあげて来る喜びと力と平安とに満たされています。

彼は自分を決して誇りません。すべては自分に及およぶ神の恵みの業わざであることをよくよく知っています。それゆえに、神を讚美ほめするのです。

主なる神は新しき歌を我が口に与え、讚美の歌

をわが口に授けたまえり。

と神をほめ称たがえるのです。

結局、人生において、いつまでも存続するものは、「信仰と希望と愛とこの三つである。この内で最も大いなるものは愛である」と聖書は教えますが、確かなことは人の愛ではなく神の我が身みに及およぶ愛であります。その神の愛の事実に信しんを置き、希望に生きるとき、希望はもはやただの願いではなく神の力となって、その者の内に喜びと安心と勇氣とを授けるのです。

愛する友よ。神の愛、キリストの言葉に思いを向けよう。

みちしるべやすらぎ

神は我らの避所また力なり

— 聖書 —

神はわれらの避けどころ

松 下 昌 義

神はわれらの避所^{とげころ}また力なり、
悩めるときにの^{とげ}かき助けなり。

されば、たとい地は震わり、

山は海の真中に移るとも、われらは恐れじ。

たといその水が鳴りとどろきてさわぐとも、

その溢れ来りて山がゆり動くとも、

われは恐れじ。……

万軍の主なる神がわれらと共におられる。

— 旧約聖書 詩篇四六一 —

人生にはさまざまな苦難があります。苦しみや悲しみが無い人生など、何処にもありません。

自分の力や知恵で対処できる苦しみや悲しみは、自分にとって本当の苦しみではなく、悲しみでもありません。

人生における本当の苦しみや悲しみは、自分の力や知恵で、どうすることも出来ない苦しみや悲しみ

のことです。

自分自身の愚かから生まれて来た苦しみや悲しみは、謝りの心をもって、自分に引き受け頂かねばなりません。そうすることによって、私達は一層に智慧が増し加えられ、より強く明るく生きる人と成長させられます。

どのような人も、必ず自分の愚かで、自分自身に苦しみや悲しみをもたらすものです。愚かしいことをしないで人生を過ごす人など、ひとりもありません。しかし、愚かなことをしてしまった自分に、自分自身がどのように関わるかは、人によって違います。その場合に大切なことは、自分自身に素直に謝ることです。自分が自分自身に謝るとは、自分のうちなる霊に謝ることなのです。内なる霊は神に通じているのです。

さまざまな言い訳をする人がいます。自分の愚かを素直に認めないばかりか、他人の責任にしたり、社会の責任にしたりする人がいます。このような人は、自分をまします愚かに導き、より大きな悲しみと苦しみを作り出す自分になっているのです。

どのように愚かであっても、わたしたちが謙虚になり深く謝るならば、それは赦され新しい自分を作りだす力と智慧に変えられるでしょう。

x

x

自分の愚かとはまったく関わりのない悲しみや苦しみが、自分のところに来ることがあります。「なぜ、わたしが、このような苦しみや悲しみに出会わなければならないのか」と思うときがあります。自分の身に覚えがない苦しみを、背負わなければならないときがあります。自分よりも、もっと悪人と思われる人が苦しまないで、なぜ自分がこれほどに苦しまなければならないのだ、と思うときがあります。

身におぼえのない苦しみには、何かの理由があるのでしょうか。私達はその答えを知りたいと思います。世間の人々はさまざま尤もらしい答えを言います。苦しむ人はその答えを求めて、西に東に走ります。ある人は自分の運命、宿命と諦めます。はたして、本当のところはどうなのでしょうか。

身におぼえのない苦しみにも、また、身におぼえのある苦しみに、それなりの理由があるのです。理由のない苦しみはありません。苦しみにはすべてそれなりの理由があるので、自分の愚かさから出た苦しみに、自分の内なる霊に素直に謝ることが大切だ、と先に申しました。でも、身におぼえのない苦しみにはどのようにすればよいのでしょうか。

その答えは明確です。祈ることです。苦しみから逃れるために祈るより他ないので、祈るのでしょうか。そうではありません。自分の苦しみに理由があるにも関わらず、その理由が分からないので、祈るのです。

どのような苦しみも、苦しませるために苦しみがあるのではありません。そうではなくて、どのような苦しみも、救うために苦しみがあるのです。その意味で、多くの苦しみをもつ者ほど救われるのです。しかし、苦しみをただ苦しむだけ、苦しみを嘆き呪うだけならば、苦しみが却ってその者をより大きい悲惨に導くでしょう。

苦しむ者だけが、それによって得る栄光があるのです。その栄光は、苦しみを知らぬ者には絶対に得ることは出来ません。その意味で、苦しみは感謝なのです。

しかし、苦しみは、やはり苦しみです。

てんにいます おんちちうえをよびて

おんちちうえさま おんちちうえさまとなえ

まつる

いずるいきによび いるいきによびたてまつる

われは 御名をよぶばかりのものにてあり

若くして死を前にした八木重吉の苦しみと祈りと安らぎとが、ひしひしと私の魂に伝わってきます。

死をおもう そのおもいもつきはては

ちちよ ちちよと 御名をよぶ

苦しむ友よ。神はあなたの苦しみを知り、必ず答え給う。

みちしるべやすらぎ

神は、わがさすらいを数えられる

—聖書—

神の書に記しるされている

松下昌義

神よ、われをあわれみ給え

……神はわがさすらいを数えられた

わが涙を神の皮袋にたくわえ給え

これは皆 神の書に記されているではないか

われ叫ぶとき

われに敵する者は後にしりぞく

それにより神われに味方し給うことを知る

われ 神の御言葉を賛美する

神に依り頼み われに恐れなし……

神はわが涙を死より、わが足を躓つまずきより救い

命の光りの中に

神の御前を歩ませ給う。

—旧約聖書 詩篇五六篇—

x

これは嘆なげきの詩うたです。人は嘆なげきを持たないで生きることはできません。

誰も信まじることが出来なくなり、すべての人が自分の敵に見ることがあります。これは人生の現実の確かな一面です。

しかし、この詩うたの人はそのような嘆なげきのなかにありながら、自分の最も深いところに安心やすみを持っています。

恐れをいだくとき

われは神に依り頼む

われ神に在あってその御言葉ことばを讃ほめる

神に依り頼んで恐れなし

肉にくにすぎない者が

われに何をなし得ようか

すみやかに我を助け給え。—四節と五節—

これこそ信仰まことに生きる人の祝福であります。人が信仰まことに生きていてもいなくても、人生の現実の敵あかしきは少しも変わりなく迫り来ます。しかし、神を仰いで生きる者は、決して倒たふされることはありません。彼は倒れないのです。否、神の光りの内に生きることを知っている限り、神はその人を決して倒たふさせられません。

x

この折ひりの詩うたは、幾いくつかに分けられますが、冒頭はつこうに掲あげた部分は、この詩うたに於いて中心的部分であると言いわれています。

特に「神はわがさすらいを数えられた」という言葉には心がひかれます。

彼は、今までの苦しみ、戦い、嘆き、不安、忍耐など、数々のことを思い返し、すべてが神の胸の内におさめられ、慈しみの眼差しの前にあったことを知り、限りなき平安と希望とに満たされています。

「わが涙を神の皮袋にたくわえ、神の書に記されている」と彼が詩うとき、彼が自分の人生に於いて、何を目当てとなし、どこに最後の抛り処を求めて生きていくかがよく分かかります。

人は人生に於いて、何度もつまずきます。不安と恐れに打ちひしがれ涙します。叫べど呼べども応えなし、という状況に立たされます。

しかし、そのような嘆きの状況から彼を立たしめるのは彼の信仰であります。

これみな、神の書に記されているではないか

われ叫ぶとき

われに敵する者は後にしりぞく

人は知らずとも、神知り給う、人は見ることなくとも、神は見てい給う、人は偽り記すとも、神は真実を記し給う、という確かな信仰が、彼を嘆きから希望へと立たしめるのであります。

そのとき、過去のすべての嘆きが、決して無意味でなく、

そのひとつひとつが神の前に意味あることとなり、天に宝を積むことに気づくのです。このような信仰が与えてくれる智慧と喜びは、嘆きと不安とをもたらす敵の智恵を消し去らせ無力化してしまうのです。この内面の平安を彼は、「われに敵する者は後にしりぞく」と詩ったのです。

最後に彼は賛美でおわります。

神はわが涙を死より わが足を躓きより救い
命の光りの中に
神の御前を歩ませ給う

人はさまざまな嘆きと苦しみとを自分に背負って生きています。誰もその人の苦しみや嘆き不安を知りません。否、知り得ることは出来ないので。最後に、人は決して頼みにはなりません。否、頼みに出来ないし、してはならないのです。所詮、我も人も限りある弱き者であります。

愛する友よ。神を仰ごう。われらが涙をたくわえ給う神を仰ごう。われらがさすらいを数え、命の書に記され覚えてい給う神を仰ごう。

この詩の最後の賛美を声を大にし、天に向って、この詩の人と共に歌いあげよう。

みちしるべ やすらぎ

神の慈しきは、命にまさる恵み 一聖書一

神の恵みは命にまさる

松下昌義

神よ、汝はわが神

われ汝を尋ねもとめる

わが魂は渴き 汝を慕う

汝を待つて わがからだは

渴き切った大地のように衰え

水なき地のごとく汝を慕う

今 われは聖所にあつて汝を仰ぎ望み

汝の力と栄えを見る

汝の慈しきは命にまさる恵み

わが唇は汝をほめたたえる

わが命のある限り 汝をたたえる

わが手を高くあげ 御名により祈る

わが魂は乳と髓のもてなしを受けたごとく飽

き足り

わが唇は喜びの歌をうたい

わが口は賛美の声をあげる

—旧約聖書 詩篇六三篇—

詩篇のすべては祈りであります。ですから、個

人的な好き嫌いなど言うべきではありませんが、
あえて、好む詩篇をと言われれば、わたしはその
一つとしてこの六三篇をあげます。

この詩篇の人は苦しみの中にいるようです。極
度の苦しみは人を熱心に神に向かわしめるか、さ
もなければ、人をただ絶望におとし入れます。そ
れは、その人のそれまでの生き方が決めるのです。
その昔、ヨブという人は、極度の苦難の末、次
のように祈り告白しました。

「あなた（神）のことを耳（言葉だけ）にして
おりました。しかし今、この目であなたを仰ぎ見
ます。それゆえ、わたしは塵と灰の上に伏し、自
分を退け悔いあらためます」

—旧約聖書ヨブ記四二、五一—

彼はそれまでの神を求める生き方の故に、極度
の苦難をとおして、遂に神の恵みを見ることが出
来たのです。神を求めるころなくして、神に出
会うことは出来ません。

この詩篇の人も苦難の中でいよいよ、神にたい
する求め切になり、神との交わりがいよいよ密と
なっていくのです。

わが床につくときにも御名を唱え
汝への祈りを口ずさみて夜をすぞす

そして、彼の神への確信は、ますます増していきます。

汝は我が助けとなられ

汝の翼の蔭でわれは喜ぶ

わが魂は汝の後においすがり

汝の右の御手はわれを支える

x

x

これを詩う人が、どれほどに神を慕い求める信仰の人であるかということは、「神を待って、わが体は、渴き切った大地のように衰え」という祈りの言葉によって示されています。

彼が生きる自然の風土は、水の乏しい砂漠的な風土であります。特に、乾燥の季節には、その渴きは極度に達し、水の豊富な風土に住む私達日本人には、その渴きは到底理解できないのだとおもいます。

ですから、神を待つことが、渴き切った大地のごとく、という言葉の持つ切実さがどれほどのことなのかも理解できません。さらに、「神を待って、わが体は、渴き切った大地のごとく」というときの「わが体」という表現が実に現実感のある表現だとおもいます。

「わが体」とは、神に向かい、神を求め、神を信じている信仰が、決して、精神の世界、知識の世界、つまり観念の世界のことからではなく、「わが体」の次元での切実で具体的な神との交わりのことであるということです。

はたして、わたし自身が生において、神はそれほど切実な存在であり、それほど密な関わりであるかとおもいます。

す。

今、われは聖所において神を仰ぎ望み

神の力と栄えを見る

彼は、神を信じているのでなく、神のその力と栄光とを見て、知っているのです。それだからこそ、彼は次のように祈り、賛美し、告白するのです。

神よ、汝の慈しみは、命にまさる恵み

「命にまさる恵み」とは、褒い表現であり、神体験だともいいます。

神の恵みが、命以上であるということは、神の恵みがどれほどに大きく、有難いものであるかがしれます。

神の恵みが命に勝るとは、私たちの生きていることは、ただ命によるのでなく、わたしの命を命として許してください。私達のすべてに先立って先ず、神の恵みがあるということが、まぎれもなく私達の本当の姿なのであります。

愛する友よ、このような私達の生きている現実の事実に分の思いを向けよう。そして、その恵みを肉体で実感する信仰に生きるものとされましょう。

寝ても覚めても、神を実感し、賛美していよう。



みちるべやすらぎ

昼は、助けを求めて叫び
夜も、汝の御前にあり

— 聖書 —

われは悩みに満ち

松下昌義

神よ われを救い給う神よ

昼は 助けを求めて叫び

夜も 汝の御前にある。

わが祈りを汝にとどかせ

耳を嘆きの声に傾け給え

わが魂は苦渋に満たされ

わが命は陰府に近づけり

われは墓に下る者の内に数えられ

力を失いし者と見なされ

わが魂は死者の間にあり

墓に横たわる切り殺された者のよう……

神よ なにゆえにわが魂を打ち棄て

み顔をわれより隠し給うや

われは悩みに満ち

若き時より死ぬばかりに苦しむ

汝の怒りを身に負い 絶えんばかりなり

汝の怒りはわれを圧倒し

汝の脅かしは われを絶ち滅ぼす

そは大水のごとくに 絶え間無くわれの周りに渦巻き われを取り囲む

汝は 愛する友を われより遠ざけ

われの親しき友は「暗闇のみ」

— 旧約聖書 詩篇八八 —

これは「詩篇」の中で最も悲しい詩だと言われている。たしかに、この詩は全編にわたって悲しみと嘆きと絶望とに満ちています。

しかし、この詩に接するわたしには、決して嫌悪の思いが生まれて来ないのです。

むしろ、共感と親しみを覚えるのです。なぜなのでしょううか。

× 考えてみますと、人生は決して華やかなものではないかもしれません。苦しみ、悩み、悲しみ、怒り、憤り、妬み、嫉み、裏切り、後悔、絶望、孤独……などさまざまな思いと痛みとに満ちています。これこそが人の世の常なのであります。

人はみんな、暗い何かを自分の内 に引きずって生きています。みんな、人知れずにその苦しみを

悲しみの重さを耐えて、生きていくのです。

この詩の人は、だれでもが引きずり背負って生

きている自分の重荷をそのままに、告白してくれました。
ですから、この詩に接する者は嫌悪よりも、共感を覚える
のかも知れません。

× 神さまを信じ、神さまによりすがれば、人生の苦しみは一
× 挙に去り、忽ちルンルン気分に変わる、というものではあり
ません。もしも、そのような信仰を詩う詩があるならば、そ
れこそ嫌悪を抱くことでしよう。

× 人がその人生で背負わなければならぬ苦しみや悲しみや
× 痛みは、そんなに軽いものではありません。また、信すれば
× 忽ち、悩みも苦しみも痛みも 一挙に消えてなくなるといっ
た信仰などありません。そのような効能書、をうたいあげる
宗教や信仰があるならば、それはまゆつばものであります。

× 苦しいことも、悲しいことも、自分の身に起こらないように
× 願うのが信仰ではありません。

× 何が起こっても、それに対処出来る力と知恵、希望と安心
× とを、戴くことが、神さまを信じるといふことなのであります。

× こここのところで、思い違いをすると、とんでもない宗教や
× 信心へと走ることにになり、信心を利欲と考え、ますますこの
× 世の欲に振り回されるガリガリ亡者になってしまいます。そ
× して、そのあげくには、信者同志が争うことになり、以前に
× もまして、醜悪な苦しみを自らの愚かによって招き背負うこ
× とになりましょう。

× この詩篇は最後まで苦しみを詩い続けています。しかし、
× これが人生の現実であります。

× しかし、その絶望の中に彼は、救いの神に目を向けていま
× す。これは一体どうしたことなのでしょう。

× 彼は、自分には絶望しているのです。しかし、その絶望の
× 現実の中に在って、神の手を絶望の現実の向う側に見ている
× のです。

× 自分の現実には絶望であっても、自分を越えた神の世界は光
× り輝き、自分の絶望を超えて、自分を包んでいることを信じ、
× そこに目を注いで、絶望の現実に対処しようとしているの
× です。

× だからこそ、彼は折るのです。だからこそ彼は、折れるの
× です。「神よ、われを救いたまう神よ」と。

× 今、イエスさまのお言葉を想います。

× 「汝ら、この世に在りては艱難あり、されど雄々し
× かれ、われ既に、この世に勝てり」

× 又イエスさまは祈ってくださいました。

× 「かれらをこの世から取り去ることではなく、わが
× 願いは、かれらをこの世の悪しきものから守って
× 下さることです」

× 信仰とはこの世を見ることではありません。自分自身を見
× ることでもありません。この世で真実の神を見ることであります。

みちしるべやすらぎ

神は愛である

— 聖書 —

神に願われている

松下昌義

神よ、あなたは世々にわたって、われらの住
処かきどころ 避処さきどころにてまします。山が生まれず、あ
なたが地と世界とを造り給わざりし時、永遠とこしえ
にあなたは神であられる。

あなたは、人を塵ちりに帰らせていわれる。人の
子よ、われに帰れと、あなたの目の前では、
千年も過ぎ去れば昨日のごとく、夜の間のひ
とときと同じ。あなたは、人々を大水のよう
にながれ去らせられる。

彼らはひと夜の眠りのごとく、朝に生えいで
る青草のごとし。朝に生えて栄えるが、夕ゆうぐべに
枯れる。

われらの生涯はあなたの御怒りによって消え
去り、われらの年の尽きるは、ひと息のよう
である。われらの人生は七十年にすぎず、健
やかな者が八十年を数えても、その得るとこ
ろは労苦と悩みである。

瞬またたく間に時は過ぎ、われわれは飛び去る。

われらに自らの生涯の日を数えることを教え
て、智恵の心を得させ給え。
あなたの僕をあわれみ給え。朝にはあなたの
慈しみに満ち足らせ、生涯、喜び歌い、喜び
祝わせ給え。

あなたの御業を、あなたの僕らにあらわし給
え。子らもあなたの栄光を仰がさせ給え。
われらの神、主の美しきを、われらの上にの
ぞましめ、われらの手の業を、われらの上に
栄えさせ給え。われらの手の業を、われら
の上に栄えさせ給え。

— 旧約聖書 詩篇九十篇 —

人間は、まことに、はかない者です。かつて日蓮
は妙法蓮華經の問いに答えて「人の寿命は無常なり
出する息は入る息を待つことなし。風の前の露、尚
暫たゞえにあらず。かしこきも、はかなきも、若きも、
定めなき習なまいなり。されば先ず、終わりのことを習
うて後に、他の事を習うべし」と記しました。

人間がどれほど、はかない者であるか、というこ
とに気づくのは、友の死や親の死、さらにわが子や
兄弟姉妹の死に出会って、はじめて、しみじみと感
じ知ることでありませう。朝に紅顔の人も夕ゆうぐべには白
骨の人となってしまう、もはや、どこを摸ふしてもこ

の世に見出すことはできません。人はこの世に自分のすべてを置いて、消え去って行くのです。

すべてを置いて消え去って行かなくてはならない果敢ない者が我々であります。これは、納得するとか しないとか言うことではなく、私達の思いや願いの如何にかかわらず、私達は消え去られるのです。

先の、詩篇の記者は、そのような死を「あなたのお怒りによって消え去る」と告白しました。彼は死を当たり前のこととして受けてはいないので。死という出来事の中に 神を忘れた人間の愚かな姿を見るのです。

彼は、死を嘆いてはいるのではなく、死という事実の中に神を見失った悲しい人間の姿を見るのです。

私達は死の出来事を嘆きます。しかし、死の出来事を通して、自分に語りかけてくる神の声を、そこで聞くとはしません。しかし、この詩篇の記者はそれを聞いています。この信仰の人としての彼の偉大さがあります。

彼は、死という出来事の中に「人の子よ われに帰れ」という神の呼び声を聞くのです。それは、放蕩に身をもち崩して破滅の淵に立つ我が子に、親がその愛情のすべてをかけ涙して呼びかける声として、彼は聞くのです。

「人の子よ われに帰れ」を「人の子よ 元に帰れ」と訳す方

があります。私達がそこから生まれ出て、そこへ帰って行くところ、私達の命の故郷こそ神なのです。

ですから、彼は冒頭に喜び賛美いたします。「神よ あなたは世々にわたって われらの住処であらせられる」と。

私達は神に願いをかけられている者であります。それは、子どもが親に願う前に、親により願われている者であるのと同じであります。

人に向けられる神の願い心聞き、その愛に目覚め、そこに自分を置いて生きる者になることを、彼は祈ります。「智慧の心を得させ給え」とはそのような祈りなのです。

神を知るとは、自分が神を知ることではありません。自分が神を見ることでもありません。ましてや、自分が神に願う者となることでもありません。そうではなく、神に知られている者が自分であり、神に見られている者が自分であり、さらに、神に願われている者が自分であることに目覚めて生きることこそ、神を知ることなのであります。

ですから、彼は最後に、「あなたの御業を あなたの僕らにあらわし給え。子らもあなたの栄光を仰がせ給え。われらの神、主の美しさを われらの上にのぞまして………」と賛美するので

愛する友よ 神に願われている自分を喜ぼう 感謝しよう。

みちしるべやすらぎ

喜びをもって神を拝め —聖書—

われらは神のもの

松 下 昌 義

地のすべての人々よ、

神に向かい喜ばしき声をあげよ。

喜びをもって神を拝め。

喜びをもって神を拝め。

喜び歌って御前に進み出よ。

知れ、この主こそ神にますなれ、

神はわれらを造りたまえり。

われらは神のもの、その民

神に養われる羊の群れ。

感謝しつつその門に入り、

賛美の歌をもって神の庭に入れ。

感謝しつつ御名をたたえよ。

神は恵み深く、その憐れみかぎりなく

その真実が代に及ぶ。

—旧約聖書 詩篇百篇—

人にはさまざまな喜びがあります。人生にはさま

ざまな歓喜すべきことがあります。

さまざまな喜び、さまざまな歓喜。そのなかで、

神を知る喜び、神を仰ぐ歓喜にまさるものはありま
せん。

心おどり、胸高鳴り、全身に気張り、張り裂けん
ばかりに我が身うちふるう。

今、この詩篇の人は、このような喜び、歓喜のな
かにあります。

X X

人にはさまざまな平安があります。人生にはさま
ざまな満足があります。

さまざまな平安、さまざまな満足。そのなかで、
神を知る平安、神を仰ぐ満足にまさるものはありま
せん。

ここら安らぎ、胸静まり、全身の気、天に通じ、我
が身天地一杯となる。

今、この詩篇の人は、このような平安と満足にな
かにいます。

X X

喜びと歓喜、平安と満足との源は神にあります。

しかし、私達はそのことを忘れ、この地上のもろも
ろのものの中にそれを求めます。しかし、地上のす
べては、神の造られたものであって、そこで神の恵
みと憐れみとを見出すことがなければ、真の喜びも
満足も得ることはありません。

天の星々に、雲に、太陽に、月に、風に神の御手

を見る者は幸いです。

地上の花に、鳥に、木々に、雨に風に、神の御手を見る者は幸いです。

人生の様々な喜びと悲しみとの出来事のうちに、神の声を聞く者は幸いです。

この詩篇の人は、天地を仰いでそこに神の御手を見、神の声をそこで聞きます。それゆえに彼は叫びます。

地のすべての人々よ、神に向かい喜ばしき声をあげよ。

私達は、神の恵みと憐れみとにとり囲まれています。それからこそ、今、生きるのです。その声も姿も直接には見えなくても、聞こえなくとも、神の愛と恵みとの、その声と姿と働きとは、永遠の昔より、永遠の未来に渡り、天地のすみずみまで、及んでいるのであります。

それを信仰による目、信仰による耳で見て、聞いているこの詩篇の人は、それゆえに「神に向かい喜ばしき声をあげよ」と、地のすべての人々に喜び叫ぶのです。

喜びをもって神を拝め。喜び歌って御前に進み出よ。

神を拝むとは、神に仕えるということです。そして、神に仕えるとは、神に自分を委ね、投げ出しお任せすることです。

それはとりもおさず、神の愛と恵みのうちに自分を置くことにほかなりません。汚れたその身のままで、弱く卑しいその身のままで、悲しみと不安と恐れとを持ったその身のままで、愛と恵みと憐れみとに満ちたもう神に、我が身を置くのです。任すのです。拝むのです。それは喜びへの道です。安心への道です。

×

×

わたしは、わたし自身のものではありません。わたしは、神のものであります。わたしは、わたしで、わたしの責任はとれません。わたし自身で、わたしを支えることもできません。わたしの生も死も神のものであります。わたしの喜びも悲しみもすべて神の事です。そこで神はわたしに語り囁かれます。あなたにはわたしのものがあると。

この詩篇の人は、この自分についての事実を、信仰によって知っています。ですから喜びをもって語ります。

われらは神のもの、その民、神に養われる羊の群れ。

今、目の前は嵐であっても、黒雲が自分を覆っていても彼は、神に在る自分を見ると安心し、喜びます。そしてくるしみ悲しみを突き抜けて神を賛美するのです。

神は恵み深く、その憐れみかぎりなく、その真実は代々に及ぶ。

友よ、神に向かい頭を上げよう。胸を開こう。

みちしるべやすらぎ

天は神のもの、地は人への賜物

— 詩篇 115 —

神よ

われらにはなく

松下昌義

われらにはなく、神よ、われらにはなく、
汝の御名に栄光を帰したまえ。

汝の愛と、汝のまことのゆえに。

なにゆえに もろもろの国民は尋ねるのか、

「彼らの神はどこにいるか」と

われらの神は天にいます。

神は御心にかなうことを行われる。

彼らの偶像は銀と金にすぎず、

人間の手がつくれるもの。

口があっても話せず、目があっても見えない。

耳があってもきこえず、鼻があってもかぐこ

とはできない。

手があってもつかめず、足があっても歩け

ず、喉があっても声はでない。

銅像を造るものはそれと似る。

偶像に依り頼む者は、それと同じようになる。

— 旧約聖書 詩篇一一五篇 —

この詩を何度も声を出して言葉してみよう。

声を出して読むということは、誰かに聞かせるため
ではなく、先ず、自分自身が聞くことなのです。

同じ言葉でも、自分から出て行く時よりも、自分
自身に再び帰って来た言葉を聞いた方が、自分の深
くに入ってくるものです。

この詩を何度も言葉しているうちに、そこに、と
っても健康的な信仰の姿が見えて来ます。そして、
深い共感を感じるようになります。

× ×

「わたしの幸福のために」「わたしの健康のため
に」「わたしの……」「わたしの……」と人は
神に祈り求めます。なんと私達は貪欲な者なのでし
ようか。

いったい、この世の中で起るさまざまな争いの
原因のほとんどは、「私達の貪欲」からです。

貪欲とは、むさぼりであり、欲深いことです。そ
の欲故に、人は他人はいうに及ばず、親や妻や夫、
さらにわが子までも見捨て、殺してしまします。ま

ことに貪欲は、人を狂わせてしまうのです。

このような私達の貪欲が、人を越えて神にまで及
ぶとき、その醜悪さは窮まります。

× ×

人は、「わたしの貪欲」を叶え、満たしてくる

ものとして神をも利用します。

自分の貪欲を満たさせるために、わずかなものを捧げ、恭しく詣で、我が求めを祈ります。そして、その求めが叶えられなければ、他の神に鞍替えをしたり、多くの神と称されるものに祈れば、神のどれかが叶えてくれると思う。

そのような人にとっては、神は自分の召し使いであり、どれほど恭しく振る舞っても、その中身はまさに懇懇無礼、神に対する畏敬の念など、ひとかけらもない。あるのは「自分の貪欲」だけです。

しかし、もっと恐ろしいことが、宗教の側に起こることがあります。それは人の貪欲さを、逆手にとって、神や仏を最大限に利用して、自分の貪欲を満たそうとする「宗教」です。

言葉巧みに神や仏を担ぎだし、人々の欲望と不安に迫り、自分もひとと、ますます無節操な貪欲の渦の中へ巻き込み狂気をもたらし。このような宗教が、私達の身のまわりに無いとはいえません。

しかし、先の詩篇の人は、「われらにはなく、神よ、われらにはなく、神の御名に栄光を帰したまえ」と祈ります。彼は「神の愛」と「神の真実」とを知るからです。

彼のこの謙虚さ、謙遜さはどこから生まれてくるのでしょうか。それは、神こそが自分の命の源、神こそ自分の生涯の完成者であることを信じ、かつ知っていたからです。だ

からこそ神は、彼にとっては最も畏敬すべきお方であり、また自分と共にいてくださるお方だったので。

ですから、彼は、先ず第一に神をほめ讃えずにはおられないのです。彼にとって神の栄光は、自分の栄光なのです。決して、自分の栄光が神の栄光ではないのです。

自分の貪欲を満たしてもらって、はじめて神がほめ讃えられるのではありません。この一点を人が間違う時、宗教も信仰も、この世で最も醜悪なものとなりさがり、人を地獄におとしいれることとなります。

神を自分の源と知る信仰に生きる者は、自分に謙遜であり謙虚であります。そのような人は、喜びが来れば神に感謝します。悲しみが来れば神の御心をそこで聞こうとします。そのような人は、喜びのときには誇らず、悲しみのときには挫けません。その人け神の愛と真実とを仰いでいるからです。

その人は神と共にある自分を信仰において知っていますから、いつも安心と自信とを持って不安と惑いとを乗り越えて生きて行くことができます。

悲しむ友よ、病に伏す友よ、喜ぶ友よ、惑う友よ、高慢な友よ、不安を抱く友よ、祈れない友よ、祈りを忘れた友よ、愛するすべての友よ、神の栄光を仰ごう、神の愛と真実のゆえに。



みちしるべ やすらぎ

神を仰ごう 一聖書一

神が家を建て給わなければ

松下昌義

神が 家を建てたまわなければ
建てる者の勤労は空しく

神が、町を守りたまわなければ

番人が目を覚ましていても空しい。

汝らが早く起き 遅くやすみ

辛苦の糧を食らうは空し。

見よ 子らは神の嗣業

胎の実はその賜物

若きときの子らは

勇士の手にある矢

その矢筒に矢を満しえな

その人に幸いあれ。

町の門で敵と論争するとき

恥を受けることはない。

—旧約聖書 詩篇一二七—

この詩には、深い落ち着きと安心とがあります。

この詩には確信と喜びと感謝があります。

それは、これを詩っている人の生き方から出て

くる香りなのでしょう。

この人は神を自分の拠り処としています。彼に

とって神は、言葉や文字のうえでのものではありません。

また、理想や憧憬としての観念的な世界の神でもありません。

この人にとって神は、生活のただ中、生活の根

底にあって、日々のすべてを支え、導き、完成し

てくださる方として働きたもうお方なのです。

神をこれほど身近に覚える知恵と見識と信仰と

そ、この人に深い落ち着きと確信とを生み出させる秘密なのです。

× ×

家は生きて行く基本的な場であります。人はそこから出掛けて行き、そこへ帰って来ます。家は

ただハウスという建物ではなく、ホームという家

庭であります。家族が愛と信頼とを持って生きる

共同の場であります。

町は人がよりよく生きて行くために、それぞれ

の分にに応じて、生産活動をする場、つまり社会で

す。人はそこで交わり、助けあい、補い合って生

産し消費しつつ、より豊かな社会を作りあげて行

きます。

家庭に愛が求められるならば、社会には正義と信頼とが必要です。それらが欠けると、家庭も

社会も崩壊してしまします。

愛と正義と信頼は、それ自身で成り立つものではありません。勿論、利益共同体として、人の損得の欲によって、かりそめの愛、建前としての正義、偽善的な信頼が方便として働く事があります。しかし、それは所詮は虚構の家庭であり社会にすぎません。一旦損得の関係が崩れる時、たちまちにして、その虚構性が暴露され、家庭も社会も地獄と化します。

だからこそ、この詩の人は詩うのです。

神が家を建てたまわなければ、建てる者の勤労は空しく、神が町を守りたまわなければ、番人が目をさましていても空しい。なんじらが早く起き、遅くやすみ辛苦の糧を食うは空しい。

本当にそのとおりだと思います。

人を本当に生かすものは何か。否、人を本当に愛と正義と信頼とに、押し上げて行く力は何処からくるのか。それは神から来るのであります。人が自分の生きている足下に、神の生かしたもう力と愛とを見出すとき、人は必ず愛と正義と信頼とに生きる者へと作り上げられて行くのです。

今日、家庭には神はなく、その家族はそれぞれが自分の好むところに向かつて歩み、祈りも感謝も無く、従ってその中

心となる確かな拠り処を持っていません。何のために働き、何のために勉強するのか、親も子も知ることなく、ただ、無意味に目先のことに惹かれてことをすすめて、やたらに歳をかさねるばかりです。

たまに、神に思いを向けるならば、それは己の欲の延長線の上に、その欲望を満たす手段として利己的な思いから手を合わし、教えられた文句を唱えるのです。所詮そのような信仰は自分の欲望充足の一つの手段なのであります。そのような信仰抑から、どうしてまことの愛と正義と信頼とが生まれてくるでしょうか。ますますもって、欲呆け人間が育つばかりであります。

すべての支え主である神を見失った家庭はその中心性を失い必ず崩壊します。すべての支え主である神を見失った社会は、節操なき欲望の故に、正義と信頼は消え去り、悪巧みと利己的な不正義の横行により、混乱と争いによって自ら神の怒りを招きよせ、社会的な混乱と悲惨とを生じさせるでしょう。

ひとりびとりの足下に神の愛が働いています。家庭の中心に神がたっておられます。社会の営みの上に神の正義が輝いています。神を仰ごう。家族とともに神を仰ごう。社会をして神の正義の実現の場としよう。どのような場にも神は愛をもって働いておられます。友よ、いまそこで神を仰ごう。

みちしるべやすらぎ

神は、わが座るをも立つをも知り給う

— 聖書 —

御手をわが上におき給う

松下昌義

神よ、汝は我をさぐり、われを知りたまえり。汝はわが座るをも立つをも知り、遠くよりわが思いを弁えたもう。

汝はわが歩むをも伏すをも見分け

我がすべての道をことごとく知りたまえり。

我が舌が一言も語らぬさまに、

神よ、汝はすべてを知っておられる。

汝は前から後ろからわれを囲み

御手をわが上におきたもう。

驚くべき汝の知識は我を超え、高くして及ぶ

ことができない。

.....

われ天にのぼるとも、汝かしこにいます

陰府に身を横たえようと見よ、汝そこに

います。

曙の翼を駆け海のかなたに行きつこうとも、

汝そこにいまし

御手をもて我を導き、右の手をもつて我をと
らえたもう。

— 旧約聖書 詩篇一三九篇 —

わたしたちはすべて、神に願いをかけられている者であります。どのような時にも、どのような状態の時にも、私達は神にみつめられ、慈しみをもって願いをかけられている者が、わたしなのであります。神を仰ぐということは、神に願いをかけられている自分を知ることでもあります。その有り難さに気づくことでもあります。また、その有り難さに喜び安心することでもあります。

×

×

私達は、いつも何かをしなくてはならないと思っています。人に対して、神に対して、自分に対して何かをしなくてはならないと思っています。そして何かをすることで自分自身に安心しようとします。出来ない時は不安を覚え、できたときには安心を覚え、時として誇りを感じます。

×

×

出来たか、出来ないかではありません。そこで、一喜一憂することはありません。出来るときもあれば出来ないときもあるのが、わたしたちです。

この詩の人は、自分の全てを知っておられる神を仰いで生きています。誰も気づかない自分の心の内のすべてを、誰も知らない自分の行いのすべてを知りつくしておられる神を、彼は知っています。

彼は神を恐れているわけではありません。愚かな自分、偽善に満ちた自分、弱い自分のすべてに、愛と慈しみを注ぎ、優しく包んでいくださる神に、限り無く願われている自分を知って、その神のもとで安心し、勇気を与えられ生かされていこうとしているのです。

先に掲げた詩は一部です。聖書を開いてこの詩編を最後まで声をだして読んでみましょう。

彼がどれほどに、人生の苦しみ悩みの中を生きてきた人であるかが分かります。彼がどれほど感じ苦しみ、絶望した経験の持ち主であるかが分かります。

しかし、今この人は、人を恨み、神を呪い、人生の矛盾と不条理とを叫んだ自分の愚かさを、神の前に悔いています。

汝は我が肢体が母の体内で、まだ形なさないうちに見ておられ、わが日々はことごとく汝の書に記されている。未だ、その一日もつくられないうちから。

汝の御計らいは、我に責きこといかばかりぞや、

神よ、その数多きことか。

我これを数えんとすれども、その数は砂よりも多く、その果てを極めたと思っても、なお我汝の内にいる。

人生の喜びも悲しみもすべて、それぞれに与えられた神のおおいなる計らいの内のことであると言う。自分に起こることのようなことも、神の計らいの外にあって起こることは無いのだと言う。

闇の中にも神は見ておられる。夜も光りが我を照らす。夜も昼もともに光りを放ち、闇も光りも分かれることはない。

自分に悲しんでも神にあって悲しむことはありません。自分に苦しんでも神に在って苦しむことはありません。自分も怒っても神にあって怒ることはありません。自分に惑うことはあっても神に在って惑うことはありません。

神は、悲しみ感じ、苦しみ怒り、失敗する私達を、そのまま抱き抱えられます。

神の私達にたいするこのような願いところを、イエスさまは、身をもって示してくださいました。友よ神に在って安心しよう。どのようなときにも、その御手をわが上におき給っている神を信じ仰ぎ見よう。

みちしるべやすらぎ

げに、神の御名のみ高く、その栄光は地と
天のうえにあり
— 聖書 —

神をほめたたえよ

松 下 昌 義

神をほめたたえよ

天から 神をほめたたえよ

もろもろの高きところで 神をほめたたえよ

天使よ こそつて神をほめたたえよ

天の万軍よ こそつて神をほめたたえよ

日よ 月よ 神をほめたたえよ

輝く星よ 神をほめたたえよ

天の天よ 神をほめたたえよ

天のうえにある水よ 神をほめたたえよ

神の御名みなをほめたたえよ

神が命じ、すべてのものを創造された

神は、すべてを世々かぎりなく立て

超えない旋を与えたまえり

地において 神をほめたたえよ

海に住む竜よ 深淵よ

火よ 雹よ 雪よ 霧よ

山々よ すべての丘よ

野の獣よ すべての家畜よ

地の王よ すべての権力者よ 裁き人よ

若き男よ 若き女よ

老いたるも若きも共に

神の名をほめたたえよ

げに 神の御名のみ高く、その栄光は地と天

のうえにある。

.....
神をほめたたえよ

— 旧約聖書 詩篇一四八 —

新約聖書の黙示録という書物に、ヨハネという信
仰者が、神の啓示を受けて見たという「天上に於け
る礼拝」の光景が記されてあります。

ここでは、四人と七人の神霊と二十四人の長老と
が絶え間なく、次のような祈りの言葉を捧げ続けて
いるのであります。

聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、全能
者なる神、主、 かつておられ、今おられ、
永遠におられ、やがて来られる方。

主よ、わたしたちの神よ

あなたこそ

栄光と誉れと力とを受けるに相応しい方
あなたは万物を造られ、御心によって保ち
御心によって完成される。

— 黙示録四章五節 —

私自身、日々、この天上の禮拜にはべらせでいただいて居る者なのですが、この言葉を口ずさみ、彼等がこの言葉を唱和する声を聞くとき、全宇宙の存在理由と意義とが、ただ、この讚美の言葉に尽きることを、深く深く思い知らせて戴き有り難さに満たされるのです。

ここで、わたしが深い畏れと感謝とをもって、彼等と唱和する言葉の一つは、「……あなたこそ、栄光と誉れと力とを受けると相応しい方」という讚美の言葉であります。

わたくしは、この讚美の言葉を心底から唱えせしめられ、そこのみ安心と喜びと希望と感謝とを見出すのです。

いったい、この世のどこに、本当に「栄光と、誉れと、力とを受けると相応しいもの」があるでしょうか。

いったい、この世のどこに、本当に「栄光と、誉れと、力とを受けるとふさわしい」人間がいるのでしょうか。

すべての人は偽善であり、虚構であり、幻想にしかすぎません。本当の栄光には程遠く、誉れとされるには余りにも醜悪であり、真実の力には誰も及びません。にも関わらず、醜悪が誉めそやされ、偽善と傲慢とが栄光とされ、果敢なく、虚しく消え去る虚構の力が、本当の力のように思いこまれてあります。まことに、「天に座するもの笑いたまわん」であります。

この世の世界を、人生のすべてと見る見方に自分が縛られ

て生きていることを「世俗的な生き方」と言います。しかし先の詩篇の人は、この世がこの世ならぬ命に根拠を持ち、それによって支えられ、許されて在ることを知っています。彼はその有り難さの故に、天地のすべてのものに向かって喜びの声をあげ、根源者なる神を「ほめたたえよ」と、声の限りをつくして万物に促しつづけます。

にも関わらず、自分の思い、つまり自我にふみ留まってそこから一步も出ようとしない人々は、何時にいたっても虚構と幻想であるこの世の誉れと栄光と力とに囚われ、本当の力本当の誉れ、本当の栄光の何であるかに気づくことなく、浮き草のように自分の存在の根拠を持たぬままに、ただ右へ左へと空しく流され、遂にあとかたもなく消え失せ滅んでしまうのです。神をほめたたえることは、自分の現実のすべてのことに正しく目覚めることなのです。自分が何者であり、何故この世に在り、何をするために生きているのかという、本当の自分自身の尊く有り難き事実を知ることになるのです。

今日、人々が生き甲斐を持たず、従って死に甲斐も得ずして、ただ、無意味にこの世をうろろして、目先の欲を満たす一時的な安心で、自分の人生を紛らわしているのは、自分の存在の根拠である神をほめたたえる智慧と思い、即ち、宗敎心を棄ててしまったからであります。この詩篇の人は万感の思いをもって、最後にいま一度、「神をほめたたえよ」と、私達に促して終わっています。

みちしるべやすらぎ

わが魂よ 神をほめたたえよ 一聖書一

信仰の人

松下昌義

神をほめたたえよ、

わが魂よ 神をほめたたえよ。

我は生けるかぎり神をほめたたえ 命のあ
るかぎりわが神をほめうたわん。

世の権力者を頼みとするな 人には救うち
からはない。そのいき出て行けば かれ土
に帰る。その日彼の企ては滅びる。

神をたすけとし、その望みを神におく者は
いかに幸いなるかな。

神は天と地とを造り 海とそのなかのすべて
をつくりたまえる方。

とこしえに真実を守り、虚げられた者のた
めに審きをされる。

飢えたる者に食べ物を与え、捕らわれた者
を解き放たれる。

神は目しいた者の眼を開き うづくま、つて
いる者を起こされる。

神は従う者を愛し 他国人を守り みなし
ごとやもめを励まされる。

神は逆らう者の道を混乱させ滅ぼされる。
神はとこしえに統へおさめたまわん。

— 旧約聖書 詩篇百四十六

人の幸福とか不幸ということは、個人の立場から
だけでとらえることは出来ません。社会的、政治的
経済的な面からも見て行かなければならないでし
う。

これを詩う作者は今、政治的、経済的、宗教的な
変革の激動の時に生きています。このような
国家的規模での変革激動の時は、人の心は乱れ、不
安が増し、正義が失われ、保身をはかる権力者と民
衆との間に過酷な争いが起こります。このような社
会的現象は、いつの時代においても同じことが起こ
り、繰り返されたものです。

このような状況の中で、問題を個人的な善悪のこ
ととして矮小化せず、さりとて、政治的な問題とし
て権力者や体制との対決打倒の闘争にはしるのでも
なく、さらに、評論家的な傍観者に自分をおくこと
もせず、すべて現実を確りと見据えながら、彼は神
を仰ぐのです。

このような態度こそ信仰の人の在り方でありまし

よう。

信仰の人はときとして、歴史的な現実認識を欠く場合があります。そして、すぐに個人の罪の問題とか不義のこととして処理し、いとも簡単に「祈りましょう」などと口にして、こと足れりとするならば、それは決して「信仰の人」とはいえず、ただの「お人よし」だといえます。

信仰の人とはどのような人なのでしょうか。それは目先の現実だけを見て、軽率に過激に行動する人々であってはなりません。信仰の人は、自分が置かれている歴史的社会的な現実をよく見据え、神に対して自分を決断し覚悟をする人であります。ここでいう決断とはなんでしょうか。それは神を信じて委ねるということです。では覚悟とは何でしょうか。それは命を捧げるといふ覚悟であります。

これを詩う信仰の人は、現実のさまざまな矛盾と不条理のただ中に在るにも関わらず、「ハレルヤー」と自分の全存在、全生活をかけて神を讚美いたします。自分の置かれている状況がどのようなであっても、「我は生ける限り神をほめうたわん」と告白いたします。

彼は、この世のどのような人にも、どのような政策にも智恵にも、最後の拠り処を求めません。

日頃、威勢のいいことを語っている人間が、問題が生じ、己に危険が迫ると、すぐに、権力者に頼み、小賢しい人間の企

てに己が身をゆだねることがあります。

しかし、この信仰の人は詩います。「世の権力者を頼みとするな。人には救う力はない。その息止まれば、すべては土にかえり、その企ても消え去る」と。

信仰の人は希望に生きる人であります。信仰による希望とはただの願いや望みではなく、確信であります。

信仰の人が持つ確信とは、自分の信念ではありません。自分がつくりあげる論理の帰結でもありません。そうではなく神の確かさによる確信であります。神の確かさを自分の確信として戴くことが信仰の確信であります。

ですから、自分が置かれている現実がどれほど悲惨で苦しみと悲しさに満ちていても、またどれほどの悪が支配していても信仰の人は神の確信に自分を置きそこに堅く立っているのです。イエスさまは、「神に求めるものはすでにあたえられたと思うべし」と示された。神の眞実を本当に信じている者はすべて自分の現在に神の働きを見るのです。

この詩は、最後にまた「ハレルヤー」すなわち「神をほめたたえよ」という歡喜で結ばれています。

友よ、信仰の人として神の絶大な命を仰ぎ見て、自分の現在に雄々しく立たしめられようではありませんか。

